奈良県大淀町文化財調査報告 第４集

# 平成１７・１８年度
# 大淀町文化財調査報告

## －史跡比曽寺跡・大淀桜ヶ丘遺跡－

奈良県大淀町教育委員会 編
2008年３月

# 序

奈良県内でも有数の大河である吉野川に育まれ、豊かな文化を営んできたわが町は、縄文時代以来の深い歴史と共に、人々の行き交う吉野の門戸として栄えてまいりました。

当町教育委員会では、これらの歴史文化遺産を継承し、その保護と活用事業をよりいっそう強化するため、平成17年度より文化財専門職を配置し、発掘調査をはじめとする各種文化財事業を推し進めてまいりました。このたび刊行の運びとなりました本書も、その成果のひとつであります。

当町主体の調査としては始めての試みとなった史跡比曽寺跡の調査は、20平米程度の小規模なものでしたが、中世に遡る比曽寺の東端部分の遺構を発見することができました。

また、町立大淀桜ヶ丘小学校の改築にともない実施いたしました大淀桜ヶ丘遺跡の調査では、神社あるいは寺院の一角とみられる江戸時代の穴と溝をみつけることができました。

これらの成果を本書で公にできることは、本町の教育行政にとってもひとしおの慶びであります。

最後になりましたが、調査にあたり様々なご指導、ご配慮を賜りました地元の皆様と、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所をはじめとする関係諸氏に、心より御礼申し上げます。

平成20年3月31日

大淀町教育委員会
教育長 池田 辰治

# 例　言

1　本書は、大淀町立大淀桜ヶ丘小学校改築にともなう大淀桜ヶ丘遺跡の埋蔵文化財試掘確認調査と、町道東部４号線の改修にともなう史跡比曽寺跡の埋蔵文化財試掘確認調査の報告書です。

2　調査地点は、奈良県吉野郡大淀町下渕・桧垣本（大淀桜ヶ丘遺跡）および同町比曽字寺内・西谷（史跡比曽寺跡）に所在します。

3　大淀桜ヶ丘遺跡の試掘確認調査は、奈良県大淀町教育委員会が2005年10月３日から11月18日の計35日間（実質１ヶ月）で実施しました。

史跡比曽寺跡の試掘確認調査は、奈良県大淀町教育委員会が2005年10月21日から31日の期間で実施しました。また本書には、1983年及び1993年に実施された奈良県立橿原考古学研究所による史跡比曽寺跡の試掘調査報告を再掲し、平成17･18年度に実施した工事にともなう史跡比曽寺跡の立会調査報告もあわせて掲載しました。

【調査体制】調査主体　奈良県大淀町教育委員会

調査担当　奈良県大淀町教育委員会生涯学習課　松田　度

調査指導　奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所

4　本書で用いた高度は絶対標高（T.P.）を示し、方位は磁北を示します。

5　本書にかかわる整理作業は、奈良県教育委員会ならびに奈良県立橿原考古学研究所のご指導のもと、奈良県大淀町教育委員会生涯学習課がおこないました。

6　本書の編集は、奈良県教育委員会ならびに奈良県立橿原考古学研究所のご指導のもと、奈良県大淀町教育委員会生涯学習課　松田 度がおこないました。本書の執筆分担は目次と文末に記しましたが、とくに記載のない場合は松田が執筆しています。

7　本書で報告した出土遺物は、奈良県大淀町教育委員会が保管しています。

8　発掘調査および整理作業参加者は以下の方々です（順不同・敬称略）。

井ノ本泰通　梶間敏男　中内功　服部菊夫　箕輪延一　脇坂聖

大西カヨ　岡本佳千予　柏木みさを　駒谷ヨシ子　宮川米子

9　発掘調査および整理作業、本書の作成に際して、以下の方々からご指導、ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます(順不同・敬称略)。

岩崎栄作　重森博　出原威佐夫　上野町子　裏野陽一　裏野武　岡野晋　川井朗　佐々木好直　清水昭博　寺沢薫　前坂尚志　前部敏晴　宮原晋一　溝上正昭　本山一路　安井宣也　世尊寺町立大淀桜ヶ丘小学校　奈良市埋蔵文化財センター　奈良県立橿原考古学研究所　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　市立五條文化博物館　大淀町文化財保護審議会　大淀町文化連盟

# 目　次


Ⅰ　歴史的環境 ……1

Ⅱ　調査報告 ……11

1　史跡比曽寺跡

i　調査にいたる経緯 ……11

ii　調査の成果 ……12

ア　調査の方法　　イ　基本層序　　ウ　遺構と遺物

iii　過去の発掘調査報告……20

ア　鐘楼改築にともなう試掘調査報告　(泉森 皎)

イ　回廊改修にともなう試掘調査報告　(土橋 理子)

iv　小結 ……26

写真図版 ……29

2　大淀桜ヶ丘遺跡

i　調査にいたる経緯 ……33

ii　調査の成果 ……34

ア　調査の方法　　イ　基本層序　　ウ　遺構と遺物

iii　小結 ……41
写真図版 ……43
Ⅲ　おわりに……47
抄録・奥付

# 挿図・図版目次

**挿図・表**

1　大淀町内の主要遺跡・関連文化財分布図
2　史跡比曽寺跡周辺図
3　2005 年調査トレンチ平面図
4　断面図および粘土敷き遺構平面図
5　出土遺物実測図１
6　出土遺物実測図２
7　既往の調査地点（世尊寺境内周辺）
8　1986 年調査トレンチ断面図
9　1993 年調査トレンチ半・断面図
10　桜ヶ丘遺跡周辺図・調査トレンチ配置図
11　全体図および１トレンチ平・断面図
12　３～５トレンチ平・断面図

**写真図版**

**〈カット図版〉**

町内採集の打製石斧（２ページ目）
矢走城跡採集の中国製青花碗（８ページ目）

**〈図版１〉29 ページ目**

01　比曽寺跡：３トレンチ
02　比曽寺跡：３トレンチ粘土敷き遺構

**〈図版２〉30 ページ目**

03　比曽寺跡：調査前風景
04　比曽寺跡：１トレンチ
05　比曽寺跡：２トレンチ
06　比曽寺跡：２･３トレンチ間サブトレンチ
07　比曽寺跡：３トレンチ粘土敷き遺構検出状況
08　比曽寺跡：同粘土敷き遺構検出後
09　比曽寺跡：現地説明会風景
10　比曽寺跡：石垣復旧工事風景

**〈図版３〉31 ページ目**

11　比曽寺跡：３トレンチ出土瓦（１）
12　比曽寺跡：３トレンチ出土瓦（２）

13　比曽寺跡：３トレンチ出土瓦（３）
14　比曽寺跡：３トレンチ出土須恵器（４）ほか
15　比曽寺跡：３トレンチ出土土器（６～９）
16　比曽寺跡：３トレンチ出土瓦（11）
17　比曽寺跡：石垣復旧工事出土瓦（10）
18　比曽寺跡：石垣復旧工事出土瓦（12～16）

**〈図版４〉43 ページ目**

19　桜ヶ丘遺跡：配管埋設地（調査前）
20　桜ヶ丘遺跡：１トレンチ西半
21　桜ヶ丘遺跡：１トレンチ溝１・２
22　桜ヶ丘遺跡：１トレンチ石敷１
23　桜ヶ丘遺跡：１トレンチ柱穴群
24　桜ヶ丘遺跡：１トレンチ東半
25　桜ヶ丘遺跡：１トレンチ西端
26　桜ヶ丘遺跡：２トレンチ

**〈図版５〉44 ページ目**

27　桜ヶ丘遺跡：校舎新築箇所（調査前）
28　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ
29　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ東半
30　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ東半
31　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ溝３
32　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ柱穴 14
33　桜ヶ丘遺跡：同柱穴 14 銭貨の出土状況
34　桜ヶ丘遺跡：同柱穴 14 出土の銭貨

**〈図版６〉45 ページ目**

35　桜ヶ丘遺跡：同柱穴 18 銭貨等の出土状況
36　桜ヶ丘遺跡：同柱穴 11 遺物の出土状況
37　桜ヶ丘遺跡：同柱穴 11 出土遺物
38　桜ヶ丘遺跡：同柱穴 15 遺物の出土状況
39　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ染付碗の出土状況
40　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ出土のサヌカイト剥片
41　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ出土土器
42　桜ヶ丘遺跡：３トレンチ出土のガラス玉

**〈図版７〉46 ページ目**

43　桜ヶ丘遺跡：４トレンチ東半
44　桜ヶ丘遺跡：４トレンチ南側の土層断面
45　桜ヶ丘遺跡：４トレンチ西半
46　桜ヶ丘遺跡：４トレンチサヌカイト出土土坑
47　桜ヶ丘遺跡：５トレンチ
48　桜ヶ丘遺跡：５トレンチ粘土張り床の建物跡
49　桜ヶ丘遺跡：６トレンチ遠景
50　桜ヶ丘遺跡：６トレンチ

# Ⅰ　歴史的環境

**【自然環境】**

奈良県南部にひろがる吉野地域は、奈良盆地と竜門山塊をへだてて、紀ノ川（通称吉野川）流域にいくつかの小規模な平野部を形成しています。

この吉野川は、まわりの各山塊から水を集めて、西へと流れながら蛇行をかさね、やがて奈良県と和歌山県の境に至って「紀ノ川」となり、紀淡海峡、はては太平洋へとその流れをそそいでいます。大淀町は、この吉野川の北岸に位置している台地上に開けたまちで、東西約 11 ㎞、南北 4.7 ㎞の範囲に約 120 箇所の遺跡がみつかっています。なかでも、規模の大きな集落遺跡は吉野川沿いに集中しています（**図 1**）。

**【狩人の足跡　旧石器時代から縄文時代へ】**

数万年前にさかのぼる旧石器時代の遺跡は、吉野川流域ではまだ発見されていませんが、後期旧石器時代の遺跡として有名な二上山山麓の遺跡群は、距離にして西へ数 10 ㎞の範囲内にあります。

近年、奈良県北東部の大和川流域や、吉野川流域の吉野町**宮滝遺跡**、それを南方にさかのぼった川上村の**宮の平遺跡**、上北山村の**向平遺跡**、また、2006 年には下市町の丹生でも、縄文時代初めごろ（草創期から早期にかけて）の遺跡が発見されています。高見山を東に越えた三重県松阪市飯南地区には、草創期の遺跡として有名な**粥見井尻遺跡**が、さらに東へ櫛田川をさかのぼると、早期の集落遺跡として著名な**鴻ノ木遺跡**があります。

当町でも、石器を作った残片（サヌカイトの剥片）の発見例は少なくないので、地元研究者の熱心な分布調査の成果次第で、将来、旧石器時代から縄文早期にかけての遺跡の発見例が増える事は間違いありません。

**【大淀桜ヶ丘遺跡　吉野川流域の縄文時代】**

現在、大淀町内で一番古い遺跡として、この報告に掲載した大字下渕・桧垣本にある**大淀桜ヶ丘遺跡**が知られています。この遺跡は、吉野川右岸の標高 145m の丘陵上に立地していて、大正年間から昭和初期にかけて、奈良県出身の考古学者・森本六爾、樋口清之らによって、縄文時代

の土器や石器を主とし、それ以降の時期の土器も採集できる遺跡と報告されていました。

昭和50年、大淀町立第二小学校（現桜ヶ丘小学校）の北東地点で、グラウンドの整備工事中に数多くの土器片が発見された事とあわせて、奈良県教育委員会（末永雅雄・小島俊次ら）による発掘調査がおこなわれました。調査の結果、表土の下30㎝に縄文土器の包含層があり、その下の地山（黄褐色土）に掘り込まれた、大小の竪穴住居跡や土坑、溝状の遺構が検出されました。そのうち直径60～80㎝の土坑は、内部に灰や木炭片、被熱した礫を含んでいたことから、炉跡と推定されました。

町内採集の打製石斧（田村欣一氏 提供）

この遺跡からは、縄文時代前期の代表的な土器型式とされる、爪形文を特徴とした北白川下層式土器がみつかっています。これらの土器は、すこし下流にある五條市東阿田の**稲口遺跡**でも採集されていて、さらに下流の紀ノ川下流域にある和歌山市**禰宜貝塚**の資料と共通する事も指摘されています。また、桜ヶ丘遺跡から吉野川を上流にさかのぼった、近鉄六田駅の西北50mの地点にある**櫛屋遺跡**（北六田遺跡第1地点）でも、石器とともに羽状縄文をほどこした土器片が採集されていて、縄文前期の遺跡が、吉野川沿いに点在することがわかっています。

また、近鉄六田駅の東北約450mの地点にある**北六田遺跡**（第2地点）では、縄文中期の初頭から前半にかけての土器群（船元式）がみつかっています。同じ時期の土器群は、大淀桜ヶ丘遺跡（大歳山式）、紀ノ川下流域の和歌山市鳴神遺跡でもみつかっています。また縄文中期後半から後期に属するものは、桜ヶ丘遺跡と東阿田稲口遺跡、当町西端にある**佐名伝遺跡**（1999年度調査）で出土した土器（北白川C式）1点が知られています。

**【越部ハサマ遺跡　縄文時代の墓制と文化交流】**

標高165m前後の越部川沿いにある**越部ハサマ遺跡**では、1993年におこなわれた町立第3保育所建設にともなう発掘調査で、縄文晩期（滋賀里3式）の土器を用いた土器棺2基と、その掘り方を切る配石遺構、環状あるいは馬蹄形に配列されたと土坑墓11基がみつかっています。出土品には、土坑墓の副葬品とみられる切り目石錘、打製石斧や、サヌカイト製の打製石鏃などがあ

ります。

ハサマ遺跡からは数ｋｍ上流、吉野川上流の標高 190mの河岸にある**宮滝遺跡**は、考古学者末永雅雄の調査以来 50 次をこえる調査がおこなわれていて、この時期の吉野川流域における屈指の遺跡としても著名です。これに続く時期の遺跡として、同町の**丹治遺跡**や**南国栖遺跡**が知られています。標高 160mの沖積地にひろがる丹治遺跡では、1942 年、県営貯木場の造営にともなう調査で、縄文晩期の滋賀里３式段階を中心とする土器群と配石遺構が確認されており、ハサマ遺跡との共通性がうかがえます。また、国道 370 号線の敷設工事中、五條の郷土史家だった堤昭二氏が**佐名伝遺跡**で発見した大量の土器・石器の中には、晩期初頭から中葉にかけての橿原式、連弧文をもつ東日本（大洞式系）の土器片が含まれています。付近でもこの時期のものと考えられる磨製石斧や磨り石、たたき石が地元住民によって採集され、地区の公民館で保管されています。

これらの遺跡では、配石や墓といった精神的行為のうかがえるものが明らかにされ、とくに越部ハサマ遺跡の土坑墓については、東日本地域に祖形をもとめられるような、環状・馬蹄形になる計画的な配列をみてとることができます。このようにして、吉野地域にも日本列島のおおきな文化の潮流が入り込んできたようすがわかります。

**【川沿いの集落と高地の遺跡　弥生時代】**

縄文時代のところでふれた**宮滝遺跡**は、弥生時代の集落としても著名です。弥生前期から後期にかけて集落が営まれ、とくに中期の土器が数多くみつかっています。吉野郡内では下市・吉野町各地で弥生時代の遺物の採集地点が点在していますが、どれもまだ正式な調査はなされていません。同町の**丹治遺跡**でも少量ですが、同じ時期の土器がみつかっています。

吉野川をさらに下った**佐名伝遺跡**の採集品にも、弥生時代の土器が多く含まれています（これらの土器は現在、市立五條文化博物館で保管されています）。さらに下流の五條市の**原遺跡**や**中遺跡**では、中期から後期を中心とした集落遺跡がみつかっています。五條市内の両遺跡は、吉野川流域を代表する弥生時代の集落として調査と研究が進んでいますが、これらの集落で稲作を主とする農耕が営まれていたのかどうかなど、まだわからない部分も多く残っています。

大淀町では、越部川中流域の標高 180m前後の河岸段丘上にある**常門遺跡**で、ため池の造成中

に発見された弥生時代中期（畿内第４様式）の壷があり、これは宮滝遺跡でみつかっている壺棺との類似性が指摘されています。**越部ハサマ遺跡**でも、弥生中期前葉（畿内第２様式）の櫛描文土器と、竪穴住居（松菊里型住居とされるものに類似）が２基、発見されています。

また、大規模ショッピングセンターの建設にともない調査された**土田遺跡**では、弥生時代（中期後葉から後期前葉、後期末葉）の土器片、打製石包丁（未製品か）と平面円形の竪穴住居（後期前葉）が１棟みつかっていることから、弥生時代後半期の集落の存在が想定されています。

これに対し、標高 270m前後の山間部にある**馬佐蔵坂遺跡**でも、弥生後期の土器が少量みつかっていて、この付近にもこの時代の集落があるのではと考えられています。同様に高地にある**平畑遺跡**も弥生時代の集落遺跡と考えられていますが、詳細はわかっていません。

**【竈のある風景　古墳時代】**

先述の**土田遺跡**では、古墳時代初頭に特徴的な小型鉢、庄内式大和型甕、二重口縁壺などがみつかっていて、弥生時代からの集落が古墳時代の黎明期まで続いていたことがわかります。

また、土田遺跡の東に隣接する**土田善光寺遺跡**の東端付近では、古墳時代中期後半代の須恵器が採集されています。**佐名伝遺跡**でも古墳にともなうと考えられる埴輪片が数個体分、**中増下垣内地区**でも古墳時代に遡る須恵器片が採集されています。この時期の遺跡は、このように町内でも点々と確認することができます。

しかしはっきりとした痕跡としては、いまのところ**土田遺跡**でみつかった６世紀後半ごろの、造り付け竈をもつ平面方形の竪穴住居の出現まで待たなければなりません。吉野地域でも数少ない貴重な発見例です。**佐名伝遺跡**でも 2003 年の試掘確認調査で、煙道付竈をもつ平面方形の竪穴住居がみつかっています。

このように古墳時代でも後半期になると、竈を備えた竪穴住居による生活の定着と集落の存在をみてとることができます。

**【吉野川流域と山間部の古墳群　横穴式石室の時代】**

古墳時代後期には、吉野川流域にそって、片袖式の横穴式石室をもつ**稲荷山古墳**のように、当地域で産出する緑泥片岩を石室石材として用いた古墳が多く造られるようになります。

古くは大正年間に、奈良県教育委員会（高橋健自）による**北六田古墳**（北六田１号墳）の石室と石棺の調査がおこなわれて、吉野川流域の古墳文化の一端が学会に広く知られるようになりました。その後、石棚をもつ石室として知られていた、大字新野の標高210mの山中にある**槇ヶ峯古墳**（槇ヶ峯１号墳）の測量調査がおこなわれました。

1997年には奈良県立橿原考古学研究所によって、**越部古墳**（越部１・２号墳）の調査がおこなわれました。これらは、いずれも丘陵上に営まれた小規模な群集墳と報告されています。特に越部１号墳からは、６世紀後葉～７世紀初頭にかけての須恵器、馬具、鉄器をはじめ、大刀の一部の金銅製単鳳環頭がみつかっています。この古墳と吉野川をへだてた対岸にあって、同様に金銅製の単鳳環頭がみつかった下市町阿智賀の**岡峯古墳**は、石室内に石棚があって、槇ヶ峯古墳と共に、吉野川を下った紀ノ川流域の和歌山市**岩橋千塚古墳群**に多くみられる岩橋型石室との類似性が指摘されています。

これに対し、町の北西部には大岩・今木地区を中心に群をなして広がっています。とくに今木地区には、片袖の横穴式石室である**保久良古墳**をはじめ、巨石を用いて構築された**正福寺古墳**など、未測量・未調査の古墳が多く残されています。保久良古墳は、明治27（1894）年に「健王もがり塚」に比定されるまでは、小字津角山（つかやま）にある名もない古墳でした。片側に袖をもつ横穴式石室で、今木地区にある石室のなかではもっとも古い６世紀後半頃の形式だと考えられます。

また大岩地区では、**大岩古墳群**の一部（石神古墳、大岩３・４・５号墳）が、橿原考古学研究所によって1985・86年に発掘調査されています。石神古墳（大岩１号墳）は既に盗掘をうけていましたが、特殊なかたちをした「小持器台」と呼ばれる７世紀前半の装飾付き須恵器や、日本でもめずらしい木葉状の装飾品がみつかっています。３号墳は、結晶片岩の板石でつくった造り付けの石棺を主体部とし、４号墳は石神古墳に先行する横穴式石室墳ですが、石室の石材が抜き取られていたため、詳細は不明です。

山間部では今後の分布調査などで、新たな古墳・遺跡が発見される可能性も残されていますが、川沿いに分布する古墳群には、たとえば下市町阿智賀の**野々熊古墳**や、吉野町上市の**大師山堂山**

古墳のように、紀ノ川流域に数多くみられる岩橋型石室の築造方法などが観察できるものもあり、紀ノ川・吉野川流域の文化交流をふまえて、その分布と性格を考えてゆく必要があります。このような古墳時代の歴史背景をもとに、吉野郡域最古の創建伝承をもつ古代寺院の比曽寺が造営されます。

**【古代寺院と官衙　古代】**

**比曽寺跡**がある比曽地区は、当町の東部、吉野川へと注ぐ南北の支流比曽川によって開かれた谷奥に位置し、高取山を西に迂回すれば、馬佐・田口地区を通り、壺阪山方面へと抜ける壺坂街道とつながる結節点にあります。

比曽寺は歴史上、比蘇寺、現光寺、毘蘇寺、栗天奉寺とも称されました。比曽寺の創建は多くの謎に包まれていますが、奈良時代（８世紀頃）には東西に塔を配する元薬師寺式の伽藍を備えていたと考えられています。比曽寺は、奈良時代に成立した歴史書『日本書紀』の欽明天皇14年（553）条、「…今吉野寺放光樠像也」の一文にいう「吉野寺」の事とされ、日本でもっとも古い仏像の伝承を残す寺院として知られています。

比曽寺は、平安時代には「現光寺」と呼ばれ、吉野地域の仏寺巡礼地のひとつとして知られていました。比曽寺の栄華を現在に伝える塔跡付近からは、「現光寺」の銘が入った軒丸瓦が採集されています。なお、史跡比曽寺跡の調査地点を含む世尊寺境内（約25,800㎡）は、昭和２年４月８日に国の指定史跡となっています。

かつて比曽寺を詳細に調査した石田茂作の報告によれば、飛鳥・白鳳期以前にさかのぼる素弁蓮華文の軒丸瓦や、吉野地域では例のない「画塼」が採集されています。吉野川流域で７世紀代に遡る可能性のある瓦をもつ寺院は、今日でも比曽寺跡以外に確認されていません。

なお、県指定となっている世尊寺所蔵の**木造十一面観音立像**は、頭頂部に十一面の観音をあらわした高さ約2.17mの巨像です。2006年におこなわれた奈良県教育委員会の調査では、この仏像が奈良時代に造られ、鎌倉時代と江戸時代に、頭部や腕の一部を補修していることも再確認されました。木造の十一面観音立像としては、吉野地域でもっとも古いものです。

吉野川流域では、当町中央部に位置する先述の**土田遺跡**で、７世紀前半ごろの飛鳥時代に大型

の掘立柱建物が出現し、「庭園」がつくられる奈良時代まで続きます。７世紀中ごろの斉明朝から天武・持統朝を経て、奈良時代前半期の聖武朝にかけての「吉野離宮」と推定される吉野町の**宮滝遺跡**とあわせて、この遺跡に古代吉野の郡衙に相当する「吉野監」との関係を想定することもできます。

また上田遺跡に程近い**越部古墳（１号墳）**の石室内からは、「堂」の文字を記した平安時代の墨書土器がみつかっています。地名などからも付近には寺院の存在が想定され、『日本霊異記』に登場する「越部岡堂」との関係が指摘されています。

当町の北部では、**馬佐蔵坂遺跡**からは 11 世紀の火葬墓がみつかっており、田口地区の「安佐谷」にあったと伝える古代寺院群との関連についても興味深い発見といえます。また 2007 年、先述の**中増下垣内地区**でも、地元の研究者により灰釉陶器をはじめとする平安時代初期ごろの土器が採集されており、『扶桑略記』に記す「吉野郡院」の候補地を絞り込むための貴重な成果があがっています。

**【修験道の道と居館・山城　中世】**

当町には、先述の「安佐谷」の寺院群や、佐名伝の「称林」寺、今木地区の寺院群等、既に伝承となっている寺院があります。町役場に残されている明治期の地籍図によると、**佐名伝遺跡**付近には「北堂」「堂ノ前」といった、寺院にかかわる地名が残されていて、付近では鎌倉期の土器片も採集できます。

山口県長門市清月寺に残されている梵鐘（正応２（1289）年・大和国宇智郡佐那手禰林寺の銘文あり）とあわせて、中世前半期に隆盛のあった寺院の存在が推定されます。

大淀町の中世前半期（鎌倉・南北朝時代）を物語る資料として、2002 年に**薬水遺跡**の調査がおこなわれ、平安時代後期から鎌倉時代かけての居館跡と溜井、土器溜まりがみつかっており、弘法大師の伝承を残す湧水「**薬水の井戸**」とあわせて興味深い関連性を示す発見といえます。

また**大岩古墳群**では、奈良時代から室町時代にかけて石室の再利用が行われ、16 世紀の末ごろ（安土桃山時代）からは石塔をともなう墓地群（**大岩墳墓群**・第６号地点）を形成し始めます。

径約 30ｍの積石塚である**石塚遺跡**では、付近に立っていたとされる正和４（1315）年銘の大型

五輪塔の残欠が発見され、現在は町中央部、下渕鈴が森にある行者堂に移されています。御所方面から今木を通って吉野へとぬけるルート上にあることからも、当遺跡と山岳修験とのかかわりが想定されます。また、安養寺の権現堂に安置されている**蔵王権現像**は高さ34．8㎝、鎌倉時代の様式を残す本町でもっとも古い権現像です。町内に残る**大日如来坐像**（大岩大日堂、岩壷大日寺）や永禄11・12（1568･1569）年銘のある今木の**蔵王権現堂内外石仏群**も、古代以来の修験道とのかかわりを物語るものとみてよいでしょう。

鎌倉後期に復興をとげた比曽寺には、当寺が後醍醐天皇の行幸地として「栗天奉寺」の勅額をかかげていたという記録が残されています。比曽寺の境内に建っていたとされる高さ約25mの室町時代の三重塔は、慶長2（1597）年、豊臣秀吉によって伏見に移された後、慶長5（1600）年、徳川家康によって滋賀県の園城寺（三井寺）に寄進されました。現在は重要文化財（建造物）となっており、ありし日の比曽寺を知る貴重な文化財のひとつといえます。

中世後半期（室町・安土桃山時代）の遺跡としては、未調査のため詳細はわかっていませんが、**矢走城跡**、**下渕城跡**が室町時代後期の山城とされています。特に矢走城跡は、廓や堅堀、堀切、平坦面がよく残っており、16世紀代の中国製青花碗などが採集されています。近年は地元研究者の踏査によって、谷を挟んだ西側の字シガイクボにも山城跡が確認されており、一連の城郭施設となることが指摘されています。

矢走城跡採集の青花碗（町教育委員会保管）

このような戦国期の山城や居館跡は、小規模なものも含めると町内各地に造営された可能性がありますが、今後の分布調査によって、新たに発見される日も近いでしょう。このように室町時代からの戦乱が収束した後、続いて江戸幕府による統治が始まってゆきます。

**【にぎわう街道　比曽石の流通　近世】**

**伊勢南街道**は和歌山県から奈良・三重県境の高見峠を越えて三重県松阪市へ向かう和歌山街道の別称です。大淀町では紀ノ川（吉野川）北岸に沿って東西に通じる西の佐名伝地区から東の増口地区までの約10㎞がそれにあたります。

江戸時代には越部地区に**本陣**（秋山家）と**脇本陣**（吉條家・現存）、土田地区に伝馬が設けられていました。江戸時代の半ば頃から「おかげまいり」と称して熱狂的な伊勢参りが流行しましたが、伊勢南街道もその旅人たちで賑わい、その名残は町内各地に残っています。

吉野町に程近い街道沿いに今も石灯籠を残す「**柳の渡し**」は、大淀町北六田地区と、南岸の吉野町六田地区とを結んだ渡しで、平安時代に醍醐寺の開祖・聖宝理源大師（832－909）が開いたとされ、美吉野橋がかかるまで、他の数箇所の渡しとともに、近世吉野山の玄関口として大いに賑わいました。

近世の比曽寺は、17 世紀末から 18 世紀初頭にかけて復興の機運が高まり、江戸時代半ばの寛延 4（1751）年からは禅宗寺院の世尊寺として現在に至っています。当該期を物語る文化財としては、寛政 8 (1796)年の修理札がみつかった県指定有形文化財の**太子堂**が残されています。屋根にのる軒丸瓦には、後醍醐天皇から賜ったとされる、「栗天奉寺」の名をかたどる「栗」の字が残されていますが、その創建については、詳細は判明していません。

この時代の吉野地域を特徴づけるものとして、**比曽石の石造物群**があります。比曽石とは、小豆色の石英安山岩で、石器・石塔・石碑・石灯籠・階段・石垣・礎石・手水鉢・玉垣・墓石・石仏・郡境石などを製作していたようです。吉野地域でも、寛文二年（1663）の供養塔（如意輪寺境内）を年代のわかる最古の例として、五條・吉野各地で 17 世紀後半代の製品が確認でき、18 世紀後半代から 19 世紀前半代にピークを迎えます。使用方法として、神社関係の石造物（石灯籠や常夜灯、階段）が多く、墓石として用いられている例もあります。分布は、北が橿原市、南は下市町や川上村で、吉野川流域を中心とした流通を想定できますが、その分布の中心地は大淀町東部付近の地域です。

なお、現在吉野川に面する出口地区では比曽石を扱う石工屋が今も残っています。比曽石という名称は、石材の採石地であることも含めて、その石材の主な搬出地が当町の比曽付近にあったことを示しています。

このような数 10km をこえる広域の石材流通には、木材加工などに代表される吉野川の水運が大きな役割を果たしたことも容易に想像できます。

**【近代化遺産と大淀町　近代から現代へ】**

明治 22（1889）年４月に大淀村が生まれ、大正 10（1921）年２月、大淀町が発足しました。これまで見てきたような遺跡の再発見とあわせて、町内の歴史を見直す機運が高まりました。大正７（1918）年刊行の『大淀村風俗誌』、昭和 47（1972）年刊行の『大淀町史』と大淀村・大淀町の歴史編纂事業が続いて、その後さまざまなかたちで文化財の見直しがあり、近代化遺産もまた文化財のひとつとされるようになりました。

当町では、大正元（1912）年に吉野郡内で初めて列車（吉野軽便鉄道）が開通しました。その名残は、薬水地区にあるレンガ造り高架トンネルの**薬水門**や、北六田地区にある軽便鉄道の終着駅であった**旧吉野駅**（現在の近鉄六田駅）のプラットホーム跡にみることができます。

※参考文献は巻末にあわせて記載しました。

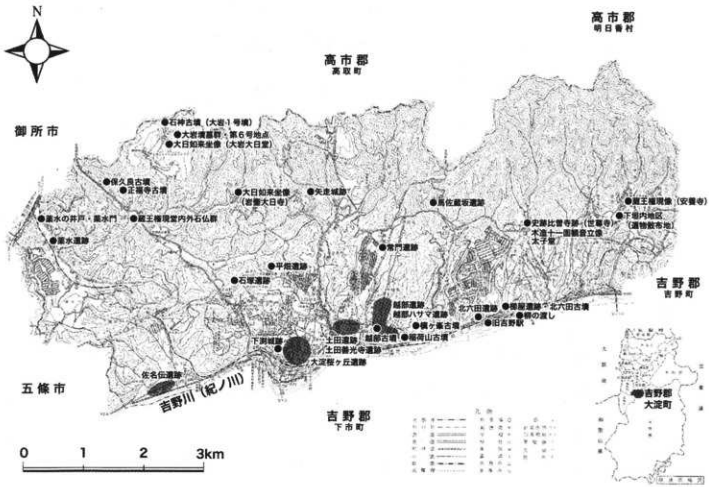



図１　大淀町内の主要遺跡・関連文化財分布図

# Ⅱ　調査報告

## 1　史跡比曽寺跡 —世尊寺周辺道路（町道東部４号線）改良工事にともなう試掘確認調査—

### ⅰ　調査にいたる経緯

奈良県大淀町（以下、町）では、平成15年度以来、地元住民の要望により町道東部４号線の一部分について改良工事を画策していました。その場所は、現在大淀町比曽に所在する世尊寺と法輪寺にはさまれた、幅３m、南北56mの区間です。

当該地点の道路は、先述区間の南側で東西に分岐し、西側は世尊寺の東脇を通り南北にぬける町道として、東側は法輪寺前へいたる砕石敷きの道路として利用されています。町道の幅は自動車一台分と狭く、隣接する法輪寺前の道路との間は、ほぼ垂直のがけ面（一部石垣となっている）で約1.5mの段差がありました。改良工事の理由は、西側の道路肩が降雨等により崩壊のおそれがあり、現状では通行の安全性を確保しがたいというものでした。

大淀町はこの要望をうけ入れて、西側の町道を法輪寺前の道路面まで切り下げて幅の広い道路に改良し、北側をスロープにして現在の町道の高さにあわせるという計画をたてましたが、当工事区域が国史跡比曽寺跡の史跡指定範囲に含まれるため、指定地内における埋蔵文化財調査との調整が必要となりました。

平成17年度にはいり、町は文化庁へ現状変更申請を提出しその許可を得るとともに、埋蔵文化財の調査について

**図２　史跡比曽寺跡周辺図**

は、奈良県教育委員会文化財保存課（以下、県教委）ならびに奈良県立橿原考古学研究所（以下、研究所）とも協議のうえ、8月22日付けで大淀町教育委員会社会教育課（当時：現生涯学習課）に配置された学芸員を調査員として、工事主体となる町役場建設課が事務的な手続きをおこなうかたちで、調査準備を進めることとなりました。

基準点測量および調査位置の測量業務に関しては、町教委が作成した仕様書に基づいて民間業者委託での実施とし、必要な調査記録の作成は調査員がおこなうことにしました。

調査方法としては、回廊・築地など寺院東端を示す遺構が想定される調査地の様相を考慮し、南北方向の道路面に対して道路幅で南北長４ｍの試掘調査区を等間隔に３箇所設定しました。調査日程については、生活用道路であることを前提に、建設課、町教委、地元住民（上比曽区長）との協議で、調査期間中は調査区内を通行止めとし、調査後工事許可が得られるまで使用可能な状態に復旧するという条件のもと、約１週間の期間で調査を実施することとなりました。上記の経過をふまえ、10月21日より試掘調査を開始し、同28日までの実質５日間で調査を終了しました。

なお、後述する粘土敷き遺構については、調査中の26日、27日の２日間で、研究所の現地視察による指導のもと、地元住民対象の現地説明会を随時実施しながら調査を進めました。

また、2006・07年にかけて、境内での工事立会調査を実施したので、あわせて報告します。

### ii　調査の成果

#### ア 調査の方法（図３）

調査区は３箇所に設置し、南側から順に１、２、３トレンチとしました。ただし、路面のアスファルトとその下部の砕石を除去した段階で、道路のほぼ中央、南北方向に、現在も使用中の水道管が埋設されていることが判明しました。そこでこの埋設管をさけるかたちで、１トレンチは西よりに幅約１ｍ、長さ４ｍの範囲を、２トレンチは東よりに幅約２ｍ、幅約４ｍの範囲を、３トレンチは東よりに幅約２ｍ、長さ約４ｍの範囲を調査対象としました。また２・３トレンチ間で東西方向の幅0.8m、長さ3.2mのサブトレンチを設定しましたので、調査面積はあわせて22.6㎡となりました。

**イ 基本層序**

基本層序は上から順に、路面（アスファルト）、砕石層、盛土層（暗褐色シルト）、地山（砂礫層）となります。調査地点ではほぼ全調査区域にわたり、地山とした砂礫層まで瓦片を含む盛土層が厚く堆積していました。ただし、3トレンチのみ堆積状況が複雑で、東側の谷地形に向かって埋土が急角度で落ち込んでいる状況を確認しました（**図4**）。

この盛土の年代は、数百年にわたる可能性もあり、路面に近い箇所では19世紀代の磁器が出土し、一部に焼土の塊がまじっていました。地山に近い最下部では古代から中世の時期とみられる瓦片が多く含まれていましたが、盛土中に近世の瓦・陶磁器は含まれていませんでした。

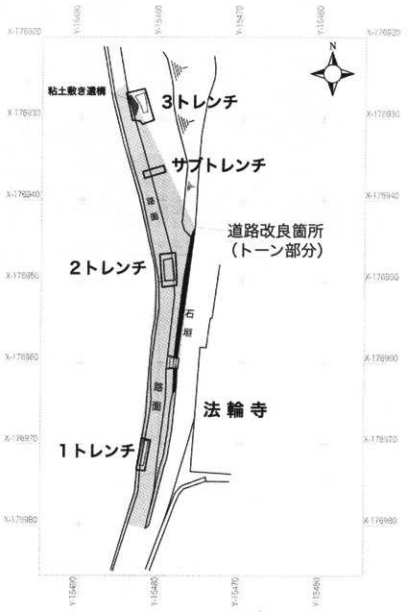



**図3　2005年調査トレンチ平面図（S=1：500）**

このように地表下約1mの地山層まで、その大部分が時期の確定できない鎌倉期以降の盛土層で、最上部に一部、近代以降の撹乱・整地層がみられました。

**ウ 遺構と遺物**

**a　遺構（図3・4）**

**【1・2トレンチ】**

1・2トレンチでは遺構はみつかっていません。

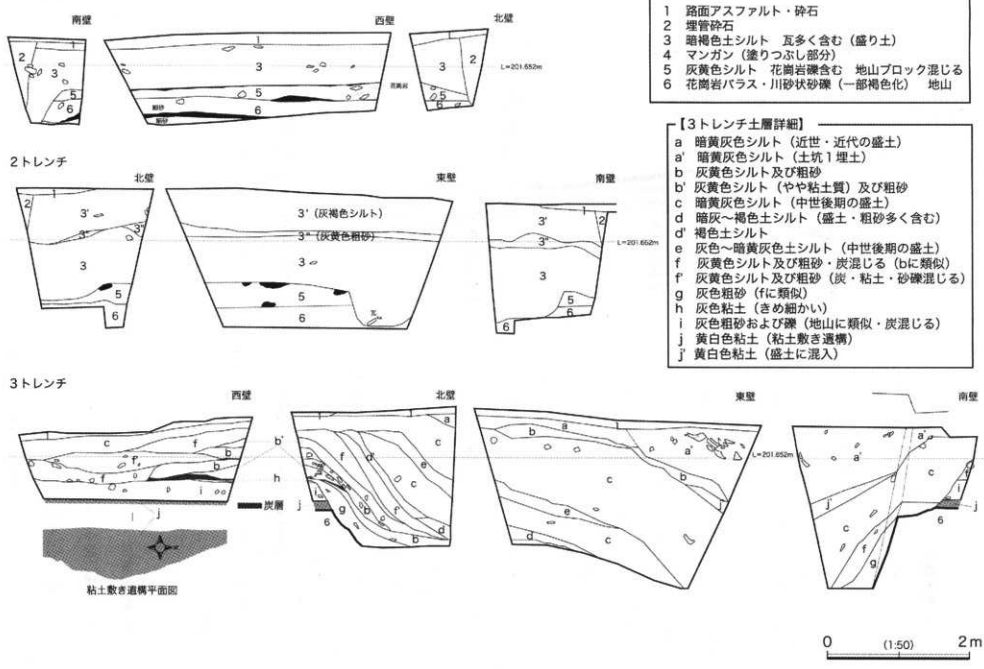



図4 断面図および粘土敷き遺構平面図

**【３トレンチ】**

３トレンチ西側では、地表下1.2mで**粘土敷き遺構**を検出しました。

粘土敷き遺構は、南北方向に伸びるかたちで残存しており、厚さは７～15cm、地山の砂礫層を平らに整形した後で敷かれていました。その上部には、地山に類似する粗砂、白色のシルト質粘土（瓦片を多く含む）とその粘土ブロックを混じえる層、黒色土層が幾重にも堆積し、３トレンチ北壁でみると山形の断面形を呈しています。さらにその上部に、先述の厚い盛土層が堆積していました。

なお、調査時に**土坑１**としたものはトレンチ南東隅の落ち込み（図４-土層a'）に、**土坑２**としたトレンチ東側の落ち込みは、盛土層（図４-土層ｃ）に相当し、**土坑３**としたものは、粘土面上部の堆積土（図４-土層i）に相当します。

この粘土敷き遺構の広がりを確認するため、３トレンチから南側に４m離れた箇所（粘土敷き遺構の延長想定部分）で、東西方向のサブトレンチを設けて掘り下げてみましたが、１・２トレンチ同様、地山まで盛土層が厚く堆積している状況でした。したがってこの粘土敷き遺構は、サブトレンチ部分ではすでに盛土造成の際に削平されたか、あるいはより西側、世尊寺境内の方向に伸びている可能性が考えられました。

その後、工事期間中に当地点の立会確認調査を数回実施しました。掘削された１・２トレンチから３トレンチにかけての工事箇所は、その大半が先述の盛土層からなっており、先述の粘土敷き遺構は確認できませんでした。

なお、サブトレンチ東側では、地表に近い最上部で、明治期以降の磁器（銅板すり絵）などを含む堆積層が部分的にみられました。また同部分で焼土の塊も出土していますが、これは明治14（1881）年、大正５（1916）年および昭和12（1937）年に当該地の寺院が火災にあった際のいずれかの痕跡と判断できます。

**【石塔等設置にともなう立会調査】**

上述の調査ののち、2006 年３月から４月にかけ、石塔等設置にともなう立会調査を実施しました。調査箇所は、本堂の西側および中門の東側の計２箇所です。

本堂西側の石塔（十三重石塔）設置工事に伴い、表土掘削、ツツジの抜根等に立ち会いました

が、当該地の土は当初の堆積土ではなく二次的に盛られたものである様子がうかがえ、出土遺物もみられませんでした。また中門の東側にも石灯籠を一基建てるとのことで、所有者から連絡を受けた後、すでに表土が剥がされ、表層をわずかに掘り下げた状況で立会調査を実施しました。

時期の特定できない瓦の細片が数点目に付きましたが、明瞭な遺構は確認できませんでした。表層の中ほどに焼土がみられましたが、明治 14 年以降、当寺が数回火災にあったとされることから、これに関連する整地土中で工事にともなう掘削は収まると判断し、立会調査を終えました。

**【石垣復旧工事にともなう立会調査】**

2007 年 1 月 18・19・23 日の午前、崩落した石垣の復旧工事にともなう立会調査を実施しました。復旧工事箇所は、境内南端の山門から東側にのびる石垣の一部で、幅約 3 m、高さ約 1.8m、奥行き約 0.8mの範囲です。崩落部分周辺の石垣の除去中と、石垣の除去後、復旧工事終了後の 3 回にわたり立会調査等をおこないました。石垣を除去した段階でその断面をみると、裏込めに栗石と瓦片が利用されていることがわかりました。裏込めにともなう埋土も、石垣設置の際、二次的に動かされたものである様子がうかがえました。工事は、石垣設置の際の埋土に影響をあたえるが、純粋な包含層には影響ないと判断し、立会調査を終えました。

立会調査の際に出土した裏込めに用いられた瓦は、おおむね室町時代初期から江戸時代に下るものまでありましたが、18 世紀以降に出現する桟瓦などの比較的新しい瓦は確認できませんでした。また狭い範囲であったためか、土器等についても確認できませんでした。

上記の結果、石垣の築造年代は、室町時代初期から江戸時代半ば以前に絞られると判断しました。採取できた主な瓦も、室町時代の資料が大半をしめているようでした。したがって今回復旧した石垣は、おおむね江戸時代前半期に室町時代の瓦を裏込めに再利用して築造されたもの、と判断しました。寺院の変遷と考え合わせるなら、禅宗寺院世尊寺として比曽寺を復興させた 18 世紀中頃に、今に見る石垣が整備されたと考えるのが妥当です。

なお、2005 年 10 月に実施した町道東部 4 号線改良工事にともなう比曽寺跡東端部の試掘調査については、当該道路と法輪寺の間に 1.5mほどの段差があり、一部石垣となっていました。当初この石垣は、付近に散布する近代の磁器等から明治期以降の新しいものかと推定していました

が、設置時期については決め手にかける状況でした。立会調査を実施した石垣との積み方の共通性からみても、両者は 18 世紀代には整備されていた寺域を画する一連の石垣であったと考えられます。今後は、史跡地内外に残る石垣の残存状況についても精査する必要があります。

b 遺物

出土遺物には、須恵器、瓦、土器・土師器、磁器、鉄製品（鉄釘等）があります。

**【須恵器】（図５-４・５）** 須恵器は細片で、壺口縁部として図化することはできましたが、元の形状は判断しがたいものです。また３トレンチ出土資料および調査区付近の表採資料として、内面に青海波文を残す甕の胴部片（**図版14**）があります。

**【瓦】** 瓦はその大半が破片となった平瓦です。瓦当面が残っている軒平瓦の一部には、鋸歯文を配する元薬師寺式の唐草文軒平瓦（３トレンチ出土・**図５-２**）、蓮華文の中心飾りに唐草文を配する中世前半期の瓦（３トレンチ土坑１出土・**図６-11**）などが出土しています。また一点の破片ですが、粘土敷き遺構上の堆積土から、白鳳期に位置づけられる川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦（**図５－１**）が出土しています。

このほか、2006年の石垣復旧工事に際し、まとまった瓦資料を採集することができました。軒平瓦は、瓦当面がほぼ完形で残っているもの（**図６-10**）をはじめ、多様な唐草文がいくつか確認できます（**図６-11～14**）。軒丸瓦は、２種の巴文を確認しています（**図６-15･16**）。

**【土器・土師器】** 土師器皿（３トレンチ盛土層中出土・**図６－６～８**）は、鎌倉時代後期から南北朝期にかけての時期におさまるもので、大半は図化が困難な小片です。

また、口縁部がまるく肥厚する甕あるいは羽釜とみられる土器の一部もみつかっています（**図５-６**）。なお一点のみですが、焼成のあまい土器片が出土しています。破片のため器種は特定できませんが、当遺跡で古代以前に遡る遺構・遺物の存在を示す可能性のある資料です。

**【磁器】** サブトレンチ盛土層最上部からの出土で染付が多く、その大半は19世紀代のものです。

**【鉄製品】** ３トレンチ盛土層中で集中して出土しています。建築部材と考えられる鉄釘は破片となっており、長さは５～８㎝です。ほかに鉤状に曲がる鉄製品が１点あります。

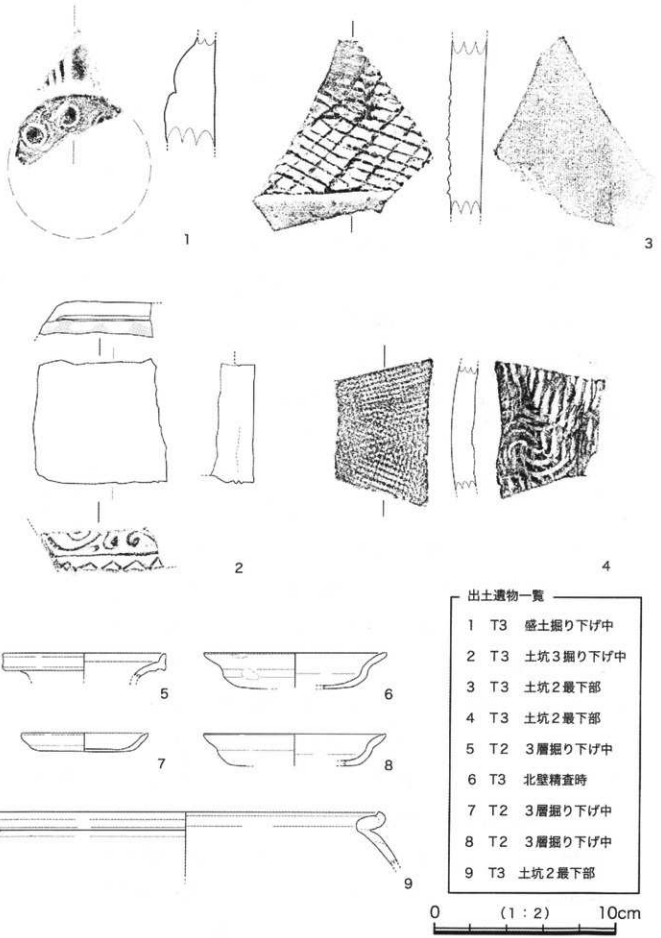

出土遺物一覧
1 T3 盛土掘り下げ中
2 T3 土坑3掘り下げ中
3 T3 土坑2最下部
4 T3 土坑2最下部
5 T2 3層掘り下げ中
6 T3 北壁精査時
7 T2 3層掘り下げ中
8 T2 3層掘り下げ中
9 T3 土坑2最下部
0 (1:2) 10cm

図5 出土遺物実測図1

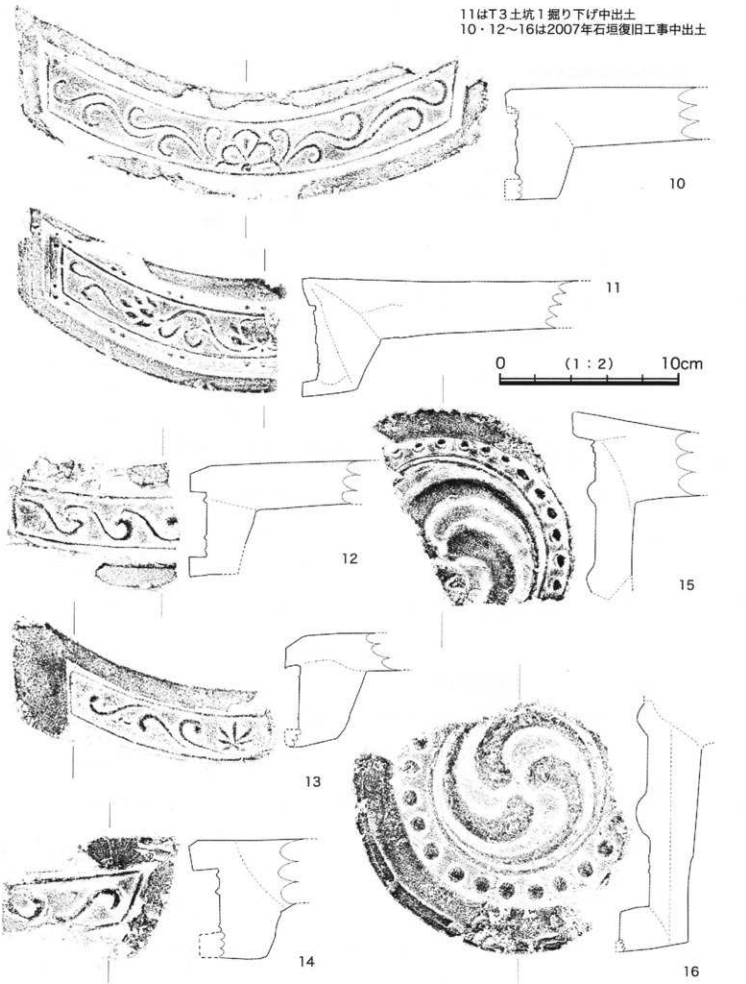

11はT３土坑１掘り下げ中出土
10・12～16は2007年石垣復旧工事中出土
10
11
0 (1：2) 10cm
12
15
13
14
16

図６　出土遺物実測図２

### iii　過去の発掘調査報告

比曽寺跡周辺では、小規模なものを含め、過去に計７回の調査がなされています。その内訳は、試掘調査が４回（本書報告の試掘調査を含む）、立会調査が３回となります。なかでも、1986年に実施された鐘楼改修にともなう試掘調査、1993年に実施された回廊改修にともなう試掘調査については、当遺跡の地下の状況を知るための有益な情報が得られたものでした。

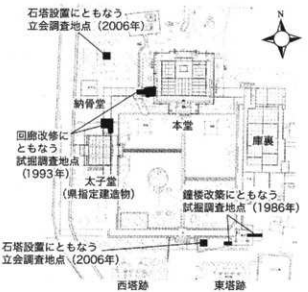



図７　既往の調査地点（世尊寺境内周辺）（S=1:500）

今回、今後の情報整理も兼ね既往の比曽寺跡の調査成果をまとめたいとの意見を、調査を実施した奈良県立橿原考古学研究所に打診してみたところ、本書への調査成果の掲載について快諾をいただきました。

なお、以下に掲載する報告文と図面は、当時の発掘調査終了報告を基にしています。各担当者のご承諾のもと、本紙に再掲させていただくことを付記します。

#### ア　鐘楼改築にともなう試掘調査報告

奈良県吉野郡大淀町大字比曽にある比曽寺跡は、東西の塔跡や金堂、講堂、中門跡なども良く残っており、昭和２年に国指定史跡となっている。この寺院跡の北側部分、金堂・講堂跡を中心に現在、世尊寺がある。世尊寺は比曽寺（当時は現光寺）の法灯をつぐ寺院であるが、曹洞宗に属し、本堂、太子堂、文殊堂、庫裏、鐘楼、中門、回廊があり、いずれも江戸時代の建物で老朽化している。

今回、現状変更申請の出た鐘楼も老朽化のはなはだしいものの一つである。鐘楼の位置は金堂跡と東塔跡の中間にあたっており、薬師寺の伽藍から推定すれば主要な遺構のない部分にあたっている。修理される鐘楼は従来の位置に建立されるもので、しかも基壇もそのまま利用して、化

粧直しを行い、礎石の不同沈下を直す程度である。鐘楼の基壇は、東側で 4.5 ㎝、西側で 3.5 ㎝の高さをもつが、これは東にゆるやかに傾斜しているためである。今回の工事は、基壇の化粧直しを行う程度で直接地下遺構に影響を与えるとは考えられないが、基壇中央部分に東西にトレンチを入れて、地下遺構の有無と、鐘楼の建立時期を検討することにした。

**【東トレンチ】**

基壇の南北中央部分に東西にトレンチを設定した。花崗岩の乱石積基壇の縁まわりを残して、東西 3 m、南北幅 1 mのトレンチである。まず基壇内は、上面から 30 ㎝余りは、近世の瓦片（桟瓦）を含む土層で、さらにその下は褐色土の堆積が 30～40 ㎝の厚さでみられ、下部に室町時代の瓦片（三ツ巴文軒丸瓦など）がうすく含まれ、拳大の栗石なども含まれている。この下は黒褐色土が 20 ㎝余り堆積して、地山の青灰色砂質土となる。

基壇の外側、雨落周辺は、現在の雨落溝の側に、新しい瓦溜がみられ、その下に近世の瓦の堆積する褐色土が 35 ㎝余り、さらに淡褐色土の整地土が 30 ㎝余りあって地山に至っている。基壇内の積み土Ⅰ・Ⅱは鐘楼基壇築成時の積み土、Ⅰは鐘楼修理時に基壇の修築が行われたものであろう。以上のことから、この地点に鐘楼を建立したのは江戸時代初頭以降であろう。

**【西トレンチ】**

基壇の西南隅に東西方向のトレンチを設定した。このトレンチは東トレンチと対応させるために設定したが、東西にトレンチの主軸を一致させることができなかったのは、世尊寺の東面回廊がこの鐘楼にとりついているためである。トレンチは東西長 1.5m、南北幅 1 mである。

まず表土は厚み 5 ㎝の茶褐色の置土で、その下は厚さ 40 ㎝余りの近世の瓦や栗石の入った埋

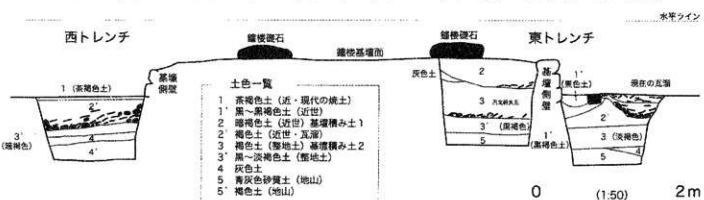



**図８　1986 年調査トレンチ断面図**

土である。この土層内には、新しい瓦類や縄目叩きをもつ平瓦類も含まれていて、大きな瓦溜のような状況であった。その下層は暗褐色土、青灰色砂土、褐色土などがほぼ水平に積まれていて、いずれも整地土とみられる。暗褐色土から下には遺物が含まれていないため、創建期の面と考えられるが、顕著な遺構はみられなかった。東・西トレンチでの観察では表土下 40 cmまで撹乱層であるため、現状変更にともなう鐘楼の修築と基壇の修理は直接地下遺構に影響を与えるものではない。（泉森 皎）

### イ　回廊改修にともなう試掘調査報告

調査地　大淀町大字比曽字寺内 764 番地

調査原因　回廊改築

調査担当　奈良県立橿原考古学研究所　土橋理子　林部均　岡林孝作　亀田美賀

調査面積　20 ㎡

調査期間　1993 年 1 月 6 日～1993 年 1 月 12 日

主な遺構　講堂基壇西辺部

主な遺物　巴文軒丸瓦　平瓦　丸瓦

**【はじめに】**

国史跡比蘇寺跡は建物が現存しないが、寺の創建は白鳳時代に遡るといわれており、現在薬師寺式伽藍配置の礎石と基壇が残っている。比蘇寺は檜曽寺、比曽寺、毗蘇寺とも書き、別名は吉野寺または現光寺ともいい、現在は世尊寺と称する。

吉野寺は平安時代末には衰微し、弘安二年（1279）金峯山寺別当泰豪が寺を再興したと『現光寺縁起』に伝えられている。後醍醐天皇（在位 1318-1339）を迎え、一時南朝行在所になったことから、鎌倉時代末頃に堂宇が存在したと考えられる。三条西実隆は、日記『実隆公記』のなかで、明応五年（1496）に比蘇寺を「勝絶之寺」として風光明媚なことを讃えており、東西両塔並

び建ち中央に楼の合う様を記している。

世尊寺の本堂は昭和 12 年に焼失・再建されており再建時に太子堂を結ぶ回廊が設けられた。今回、回廊を改修する現状変更が申請されたので、事前調査を行った。世尊寺本堂は比蘇寺講堂跡より規模が小さく、本堂周辺地表に講堂跡礎石列が露出している。講堂跡礎石群は２群あり、東西５間×南北４間の建物と東西５間×南北３間の建物礎石群がある。改修する回廊は比蘇寺講堂跡基壇上におよんでおり、本調査では講堂跡基壇西辺を確認することを目的とした。本堂西方部に東西６m・南北１．５mと２．８mのＡトレンチ、太子堂北方部に東西３．８m・南北３mと５mのＢトレンチを設定した。

**【Ａトレンチ】（図９上）**

世尊寺本堂西方部に位置するＡトレンチの南壁・西壁断面図（図９：１－３）をもとに比蘇寺講堂跡（世尊寺本堂）基壇西辺部の変遷を述べる。現地表下約 85 ㎝～95 ㎝（海抜約 201.5m）で地山面が検出された。土層断面は大別して５時期に分化できる。図９－２南壁断面図を観察すると、基壇西辺を画する２時期の石列として、下層石列 SX６と上層石列 SX７が検出され、基壇上建物の雨落ち溝として、ほぼ同位置に下層から順に溝 SD２（埋土 v）と溝 SD３（埋土 p）溝 SD４（埋土 n）を検出した。

第１期は地山面上に黄褐色土（図９（以下略）－4・7・10・i・j）を積み、硬くしまった基壇を形成しており、現状では約 20-30 ㎝の高さが残されている。第１期基壇土に遺物は含まれていない。基壇西端は石列 SX６の下部に位置し、調査では確認できなかった。溝 SD１（埋土 k）が基壇西辺形成に関わる溝と仮定すると、石列 SX６とほぼ同位置に基壇西辺を画する石組が存在していた可能性がある。第１期基壇周辺は地山面が露出していた。溝 SD２（埋土 v）は第１期基壇に伴う雨落溝と考える

第２期は第１期基壇上と基壇周辺に盛土と整地を行い、石列 SX６を西辺とする基壇を築成したと考えられる。石列 SX６は当初二段以上であった可能性はあるが、調査区では１段のみが確認された。第２期の基壇土Ａ層（2・3・6・e・g・h・x・y・z）は 30 ㎝から 40 ㎝が基壇内に残っている。土坑 SK1（埋土 8・9）は、第２期以降第４期以前の基壇上から掘り込まれた土坑で

ある。溝 SD３（埋土 p）は、硬くしまった基壇周辺整地 B 層（w・q・r・s）上面に形成された。溝 SD３は、第２期基壇建物の雨落ち溝である。第２期基壇周辺整地（r・s 層）と石列 SX６の裏込め土（x・y）は瓦小片を多く含む。瓦小片から、石列 SX６により西辺を形成する第２期基壇 A 層および周辺整地 B 層は、土は異なるが同一時期である。布目瓦片を含み、鎌倉時代またはそれよりも遡る時期と推定する。第２期は弘安二年（1279）金峯山寺別当春豪による寺再興に伴う基壇の可能性がある。

第３期は基壇西辺部と基壇周辺にまったく同じ明黄褐色粘質土の山土（土層 d）を積み土している点が第２期と異なる。基壇周辺の土（土層 d）の方が、含まれる瓦の破片の密度が高い。第２期の雨落溝 SD4（埋土 o・n）は、第３期の山土（明黄褐色粘質土）により整地された基壇上建物および雨落ち溝である。土層 d 出土瓦片から第３期基壇整地は室町時代前後と考えられる。

第４期は整地土層（c）により基壇の西端の段差を埋めて平らな地面にしている。石列 SX7 は埋められた下層石列 SX６より、東へ約 20 ㎝ずれて並べられている。

第５期の整地土は、昭和 12 年に世尊寺本堂が焼失した際の焼土と大量の瓦を含む。焼失後本堂を再建するにあたり、石列 SX7 を整地土層（1・a 層）で覆い、太子堂と本堂を結ぶ回廊を新設している。このとき回廊予定地に、規模の大きい建物の礎石が１個あり、これを抜き取った跡が検出された。現在地表面に露出している礎石は２時期の建物が重なっている。

**【Bトレンチ】（図９下）**

太子堂と本堂のあいだの回廊基壇の下層に西の村道から寺内に入る通路に伴う石列が検出された。トレンチの一部を断ち割り、太子堂が建てられた基壇は、地山上に約 80 ㎝の積み土を行っていることが確認された。

**【まとめ】**

講堂基壇西辺を画する２時期の石列として、下層石列 SX６と上層石列 SX７が検出され、基壇上建物の雨落ち溝として、ほぼ同位置に下層から順に溝 SD２（埋土 v）と溝 SD３（埋土 p）溝 SD４（埋土 n）が検出された。現存する講堂礎石の中軸線を基準とすると、創建当初の講堂基壇東西方向は約 23m であったと推定される。（土橋 理子）

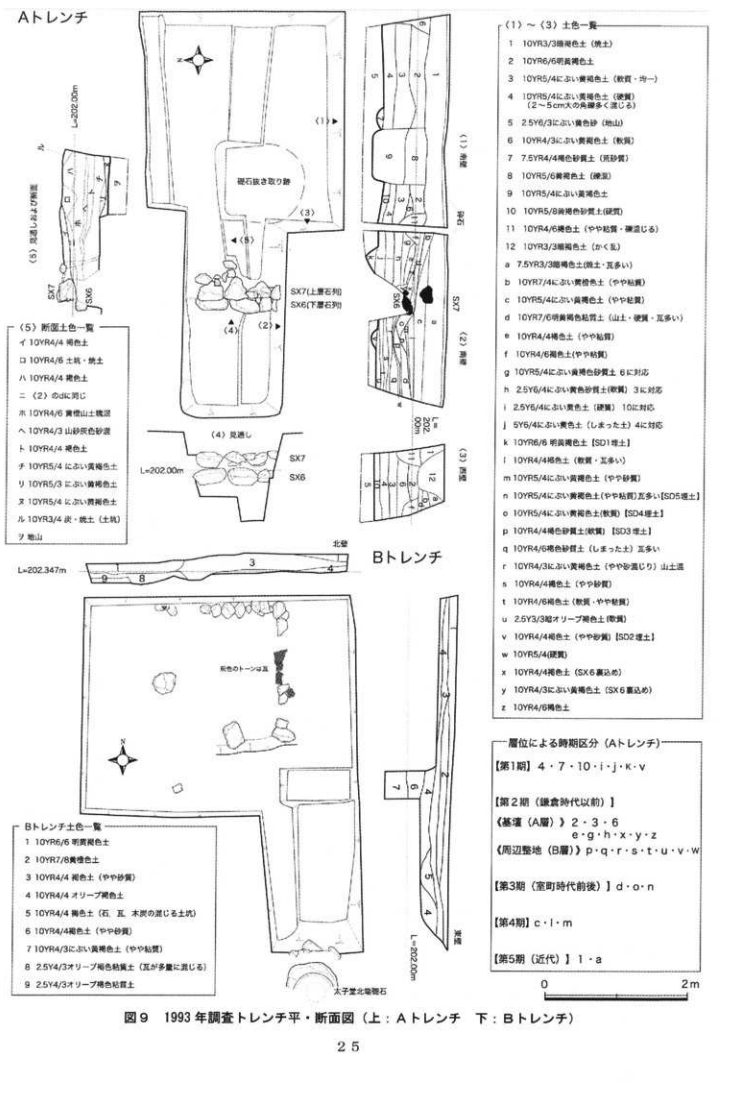



図9　1993年調査トレンチ平・断面図（上：Aトレンチ　下：Bトレンチ）

### ⅳ　小結

史跡比曽寺跡は、７世紀代から現在まで、連綿と寺院が造営され続けている遺跡です。

今回の調査では、中世前半期（14世紀代）の粘土敷き遺構と、遺構にともないませんが、白鳳期に位置づけられる瓦、中世前半期（14世紀代）を中心とした土器・瓦などを確認できました。

また、今回の調査によって、14世紀代以前の遺構面は、現在より約１m低かったということもわかりました。これは、既往の調査や、今回の調査地周囲の状況からもうなずける事です。

史跡比曽寺跡の考古学的調査は、古代寺院研究の先駆者である石田茂作の精力的な検討以来、ほとんどなされてこなかったといってよいでしょう。創建から中興にいたる過程と、近世に入っての曹洞宗への改宗等については、すでに多くの歴史研究者により、詳細な検討がなされてきていますが、その仮説の最終的な結論にいたるためには、境内の地下に眠る考古学的情報が決め手となるだろうと、かねてから当遺跡の調査については、多くの期待が寄せられていました。

今回の試掘調査では、伝承や史料のみで語られてきた比曽寺の歴史を、考古学的に検討できるいくつかの資料が得られました。とりわけ、古代寺院としての比曽寺に加え、鎌倉・南北朝期の比曽寺を発掘で明らかにできたのは、今回の調査の大きな成果といえるでしょう。

**【粘土敷き遺構の性格】**

今回の調査でみつかった粘土敷き遺構が、どのような機能を有していたのかは、今なお、はっきりとした見解を提示できません。粘土敷きの厚さは７～15ｃｍ、地山の砂礫層を平らに削った後で敷かれていました。その上部には、地山に類似する粗砂、白色のシルト質粘土（瓦片を多く含む）、粘土ブロックを混じえる層、黒色土層が幾重にも堆積し、さらにその上部に、厚い盛土層が堆積していました。また、この粘土敷き遺構を覆っていた土層堆積は、粘土敷き面上部ではほぼ水平に堆積し、河川の流れる東側へゆくにつれ急角度の流れ堆積となっていました。

これらの状況から、この粘土敷き遺構が、南北方向に伸びるかたちで残存している、14世紀代あるいはそれ以前の、当地点に推定される寺域東端を示す、回廊の床面等を構成する遺構である可能性は強いといえます。地山の上に敷かれたような検出時の状況を考慮すると、防湿効果などを意図した丁寧な基壇土の一種である可能性もあります。

盛土造成によって粘土敷き遺構が埋没した時期については、調査中に決定的な決め手となる年代を確定することはできませんでした。それを覆っていた盛土中には、明瞭な後世の撹乱を除くと、近世・近代の陶磁器が含まれておらず、出土した瓦の示す年代を考慮しても、中世後半期のある段階で、粘土敷き遺構はすでに地中深くに埋没していたものと想定されます。

既往の採集資料や残された文献史料をみると、7世紀ごろに寺域が整備された後、奈良・平安時代を通じて当地に所在した寺院は、14世紀頃に「比蘇寺」あるいは「現光寺」の名で呼ばれていました。実際に、現世尊寺境内でも「現光寺」の銘がある室町時代の軒丸瓦が数点採集されており、現光寺という寺院の実在を裏付けています。

寺伝の『現光寺縁起絵巻』（江戸時代前期に編纂）は、鎌倉時代後期の弘安2（1279）年、金峯山の奉憂が比曽寺を再興し、西大寺の興正菩薩（叡尊）に付与したと伝えます。その後、西大寺の律僧でもあった小野文観の手引きにより、延元2（1337）年に後醍醐天皇の比曽寺行幸が行われましたが、この時すでに当寺は西大寺流真言律宗の影響下にありました。高僧・叡尊に連なる西大寺の法灯が、吉野地域にも及んでいた事を史料は物語ります。

上記の歴史情報を総合的に検討すると、この粘土敷き遺構が敷設されたのは、13世紀後半から14世紀前半代（鎌倉時代後期から南北朝期）にかけての当寺院の再興期にあたるのではないかと推定されます。また、その上部に堆積した層は、それ以降、江戸時代の初めごろ（17世紀）までに造成された盛土・整地層と考えられます。そして、今回みつかった粘土敷き遺構の性格については、寺院再興にともない敷設された、寺院東端部の回廊の基壇土などの一部とも解釈できます。

**【西大寺とのかかわりを示す中世瓦】**

今回の調査成果のなかで、もうひとつ注目されるのは、今回の調査でみつかった14世紀代に位置づけられる蓮華唐草文軒平瓦（図6－11）です。奈良市西大寺旧境内の発掘調査で出土している蓮華唐草文軒平瓦には、上記の瓦とまったく同じ文様をもつものが確認できます（2007年、橿原考古学研究所附属博物館の夏季速報展『大和を掘る25』にて紹介）。すでに遺構から遊離した資料でもあり、今後の調査をまって慎重な検討を深める必要はありますが、二つの寺院の瓦生産がかかわりをもっていたことをうかがい知る手がかりといえます。

平成18年度に実施した石垣改修工事にともなう立会調査でも、今回報告したように多数の瓦資料が得られました。とりわけ今回報告した中世期の軒平瓦の文様には、５種のタイプがあります。

当地付近にはまだ瓦の窯跡等は確認されていませんが、当寺院の建造物の新造、改修にも複数の瓦窯から瓦が供給されていた可能性をうかがわせるものです。いずれも近世以前の比曽寺を飾った軒瓦ですので、今後、古代以来続く当寺の変遷過程の検討を進めてゆくうえで欠かせない成果といえます。

**【調査の学史的意義】**

本報告書は、2005年から2007年にかけて行った試掘調査・立会調査の成果に加えて、総合的に史跡比曽寺跡を考えてゆく手がかりとして、過去に実施された試掘調査についての二編の報告を掲載しました。鐘楼や太子堂の創立年代、創建時から鎌倉時代にかけての遺構面の標高などについて知る、大きな手がかりが得られています。特に、回廊改修にともなう調査では、確実に鎌倉期に遡る建物の基壇が確認されています。2005年の調査成果を含めても、当遺跡では、地山の上面に鎌倉期の遺構が良好なかたちで遺存しているとみてよいでしょう。

これらの調査成果により、創建の問題に偏りがちであった当寺院の議論を、発掘調査の情報によってある程度層位的に（通史的に）おうことが可能となりました。また中世の比曽寺と吉野地域の中世史を考えるうえで、当時の趨勢を検討できる数少ない重要資料が、考古学的手法によって得られる可能性が高くなりました。上記の文献史料との関係性など、今後より深い研究を進めてゆく必要があります。

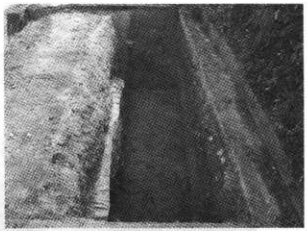
なお、みつかった粘土面は、改良工事の掘削深度より深い位置にあるため、関係者との調整のうえ、そのまま現地保存して後世に伝えてゆくこととなりました。お世話になりました各関係者、地元比曽地区の住民の方々に改めて感謝いたします。また、比曽寺跡については、平成19年度も工事立会・試掘調査を行っており、以降も工事にともなう試掘調査が予定されています。町教委では本報告とあわせて、これらの地下遺構の情報を随時整理し、今後の史跡保存活用計画の手がかりとして、また当遺跡の総合的研究を行う材料として、みなさんに還元してゆきたいと考えています。

01 比曽寺跡:3トレンチ(南から)

02 比曽寺跡:3トレンチ粘土敷き遺構(東から)

図版2

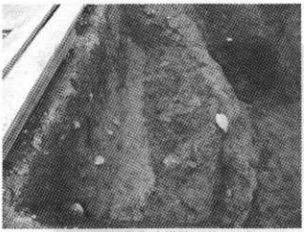
03 比曽寺跡:調査前風景(南から)



04 1トレンチ(北から)

05 2トレンチ(北から)

06 2・3トレンチ間サブトレンチ(最下部地山上面)



07 3トレンチ粘土敷き遺構検出状況(南から)

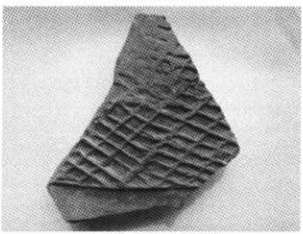
08 同粘土敷き遺構検出後(南から)

09 現地説明会風景

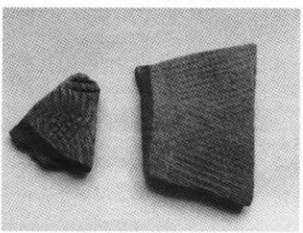
10 石垣復旧工事風景

11 3トレンチ出土瓦(1)

12 3トレンチ出土瓦(2)



13 3トレンチ出土瓦(3)



14 3トレンチ出土須恵器(4)ほか

15 3トレンチ出土土器(6～9)

16 3トレンチ出土瓦(11)

17 石垣復旧工事出土瓦(10)

18 石垣復旧工事出土瓦(12～16)

## 2　大淀桜ヶ丘遺跡　—大淀桜ヶ丘小学校校舎改築工事にともなう試掘調査—

### i　調査にいたる経緯

吉野川を見下ろす丘陵地の東端部、大淀町下渕地内に、大淀町立大淀桜ヶ丘小学校（以下、桜ヶ丘小学校）があります。小学校の西側には奈良県立大淀高等学校が、北側には住宅街と畑が広がっています。これらを含んだ約 20 万㎡の広大な土地が、『奈良県遺跡地図』に「大淀桜が丘遺跡」として登録されています（図 10）。

縄文時代前期を中心とする集落跡として著名となった桜ヶ丘遺跡では、これまでにも数回の試掘調査が実施されています。これを一覧にすると、以下のようになります。

1　「下渕遺跡」として認知（1920 年代：「第Ⅰ章 歴史的環境」を参照のこと）

2　大淀第二小学校校庭拡張工事にともなう範囲確認調査（1950・51 年）

3　大淀高校南西・南和労働会館建設の事前調査（1986 年）

4　桜ヶ丘小学校体育館ならびに仮設体育館設置工事の事前調査（2001 年）

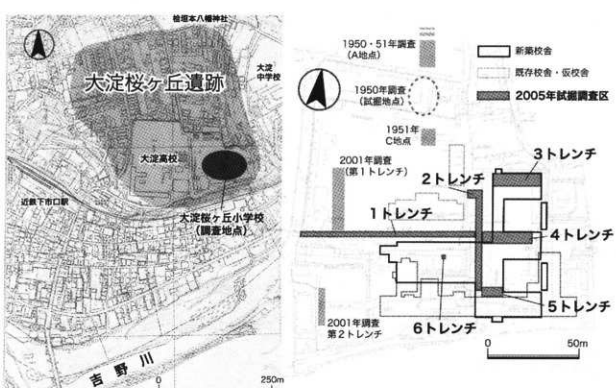



図 10　桜ヶ丘遺跡調査地点周辺図・調査トレンチ配置図

1950・51 年、奈良県教育委員会（以下、県教委）による本格的な調査が行われた後は、1986 年に遺跡の南西部で、2001 年には桜ヶ丘小学校体育館の改築にともない遺跡の東側で、奈良県立橿原考古学研究所（以下、研究所）による事前の試掘調査がおこなわれています（図 10）。

2001 年の調査報告によると、このとき縄文時代の遺構・遺物はわずかに出土しただけでしたが、小学校の敷地内ではグラウンド拡充にともなう大規模な整地がおこなわれており、遺構面の大部分が削平されていること、比較的深さのある遺構についてはグラウンドの下に残されていること、遺跡の中心地のひとつが、1950 年調査地の南西部分と、それに連なる南向きの緩斜面地の範囲に存在することが想定されていました。

桜ヶ丘小学校で校舎改築の計画がもちあがり、具体的に埋蔵文化財の調査にかかわる協議が進展しだしたのは、2004 年（平成 16 年）にさかのぼります。大淀町教育委員会（以下、町教委）の調査依頼にもとづき、研究所が試掘調査に対応することになり、校舎の改築に先立つグラウンド内の仮校舎建設工事にともない工事立会調査が実施されました。

その後、県教委、研究所の指導をうけながら、町教委で埋蔵文化財調査に関する協議を進め、今後の町文化財行政の充実と、町単体での埋蔵文化財調査の実施体制を整えるため、町は 2005 年（平成 17 年）8 月 22 日付けで町教委に嘱託の学芸員を配置しました。それをうけて当遺跡の試掘調査についても、県教委ならびに研究所の指導のもと、町教委が主体となって実施することとなりました。

**ii 調査の成果**

**ア 調査の方法**

調査体制としては、県教委、研究所の指導をうけながら、発掘調査業務と遺跡の基準点測量に関しては、町教委が作成した仕様書に基づいた民間業者委託での実施とし、その他必要な調査記録の作成は調査員がおこなうこととしました。

また調査にあたっては、従来の当遺跡内での調査結果をふまえ、工事予定区域内の埋蔵文化財包蔵地を広くカバーするかたちで試掘調査区の設定をおこない、この事前の試掘調査の結果をふ

まえて、本調査を実施するかどうかの判断を県教委・町教委の間で協議する、としました。調査区については、前述のとおり遺跡の現状把握を目的として、工事が予定されている埋管新設位置と新築校舎予定地内に試掘調査区（以下、トレンチ）を設定しました。埋管新設部分については、幅２ｍのトレンチを工事位置にあわせてＴ字形に設置し、遺構面を確認しながら地山まで掘削することとしました。新築校舎予定地については、南北幅６ｍのトレンチを東西に３本設置し、同じく遺構面を確認しながら地山までの掘削としました。また調査区の周囲にＧＰＳ測量による基準点を２点取得し、これにあわせて４ｍ角のグリッドを調査地全域にかぶせ、遺構実測の基準とし、調査区内の実測はすべて調査員の手実測によりました（図11）。

**イ　基本層序**

本遺跡の基本層序は、2003年の発掘調査報告に整理されており、今回の調査結果をふまえても、これにほとんど変更はありません。基本層序は、上位より第Ⅰ～Ⅲ層に大別されます。

**第Ⅰ層**：グラウンド表土、砕石と旧グラウンド整地土、旧校舎関連の堆積層

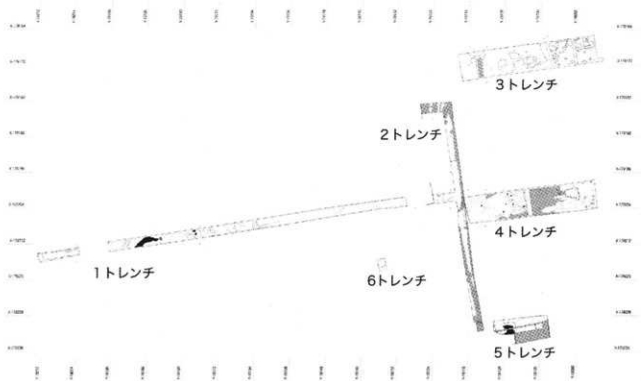
**第Ⅱ層**：旧耕土の影響をうけた暗褐色の地山部分と遺物包含層、遺構の埋土を含む

**第Ⅲ層**：基盤層となる黄褐色の地山。縄文時代前期の遺構はこの地山上面で検出されている

今回の調査では、第Ⅰ層を重機により掘削し、第Ⅱ層を人力掘削および精査の対象と考えましたが、結果、今回調査を実施した小学校グラウンドの地下は、３トレンチをのぞくほぼ全域で、地山までグラウンド造成時の整地土（Ⅰ層）が平均 30 cmの厚さで堆積し、第Ⅱ層の堆積がほとんど残っていませんでした。したがって基本的に第Ⅲ層上面までを重機掘削とし、部分的に残存している第Ⅱ層と検出した遺構について人力掘削としました。また旧来の地形については、調査区外の西側、北東側に向かって、ゆるやかな谷地形となってゆくことが判明しました。

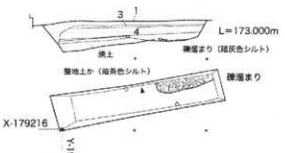
**ウ　遺構と遺物**

**a　配水管埋設箇所の遺構（１・２トレンチ）（図11）**




2005年調査トレンチ平面図（S＝1/400）

1トレンチ（西端）




土色一覧

1　第Ⅰ層　グラウンド表土（生駒土）
　　（灰褐色土　砂・パラス）
2　第Ⅱ層　砕石　青灰色
3　第Ⅰ層　旧グラウンド整地土
　　（灰色　砂・パラス）
4　第Ⅰ層　盛土　暗茶褐色土
　　（地山ブロック混じる）
5　溝１埋土　暗茶い色シルト（左肩より流れ込む）
6　溝２埋土　暗茶色シルト
7　かく乱坑埋土　暗灰茶色シルト
　（礫・レンガ・ガラス片混じる）
8　土坑埋土　暗茶褐色シルト

1トレンチ（中央部）

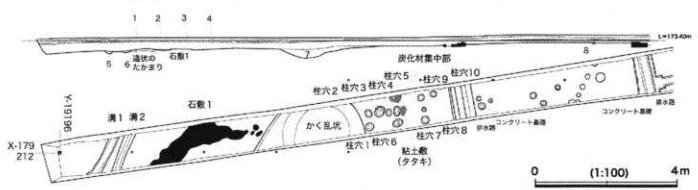



図11　2005年調査トレンチ全体図および1トレンチ平・断面図

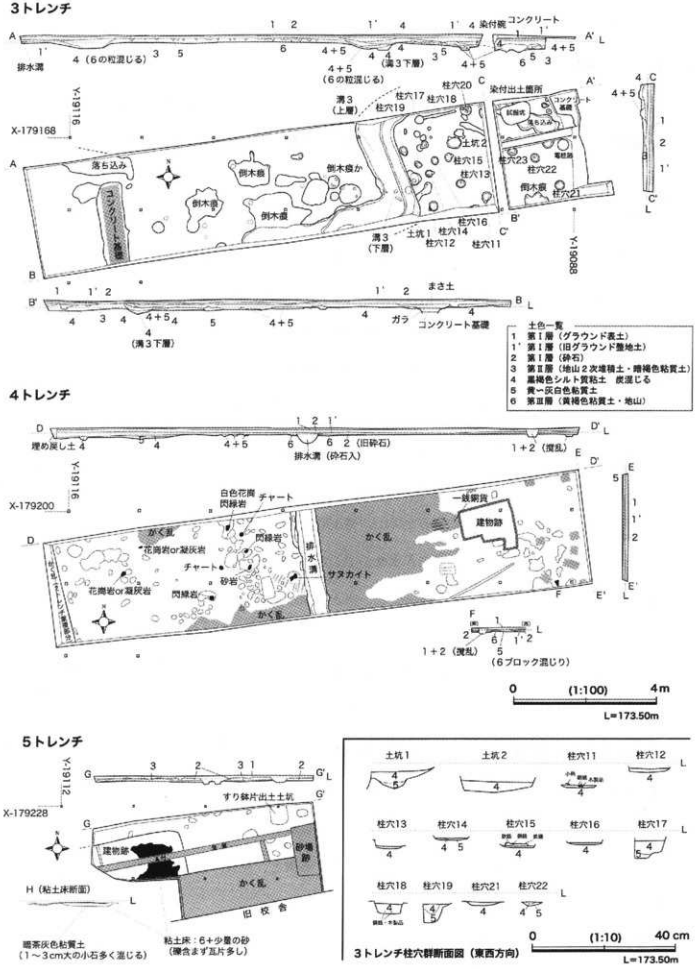



図 12　3～5トレンチ平・断面図

【１トレンチ】

調査箇所の西側にあたる１トレンチでは、中央より西側の地点で、東北東方向にのびる**溝１・２（図版 21）**と、0.5～１センチ大の小石を敷き詰めた**石敷１（図版 22）**を検出しました。溝１・２はそれぞれ幅 50～60 cmで、30～50 cmほどの間隔をあけて、平行して調査区外にのびていました。溝群と石敷１にはさまれた箇所は若干の高まりをみせ、本来この面に石敷が施されていた可能性も考えられます。これらは、里道にともなう溝と石敷きの高まりと想定されます。なお、石敷１の上から近世以降の飴釉陶器片が出土していますが、時期は特定できませんでした。

１トレンチの東側では、方形に曲がる柱穴群（**柱穴１～10**）などを検出しました（**図版 23**）。柱穴群は既に柱が抜かれた状態で、周囲には人為的に踏み荒らされた痕跡や、炭混じり土、玄関口に設けることの多い硬質の粘土部分（いわゆるタタキに類似する）などがみられました。これらは建物にともなう一部と想定されます。また、同じ遺構面からは江戸時代以降の染付片や、白色ガラスのビンなどが出土しています。

１トレンチの西端は、谷地形となるためか、盛土層（二次堆積層）の厚さが 1.5mを越え、埋管設置深度にいたっても地山を確認できませんでした（**図版 25**）。この盛土層の中位には近世以降の可能性がある焼土も含まれていましたが、出土遺物はなく時期は特定できませんでした。

【２トレンチ】

地山を検出しましたが、後世の削平が激しく、遺構・遺物は確認できませんでした（**図版 26**）。

**b 校舎新築箇所の遺構（３～５トレンチ）（図 12）**

【３トレンチ】

３トレンチの中央部から西側にかけて、風倒木の痕跡とみられる不定形の土坑を検出しました。また、３トレンチ東側では、カギの手状に屈曲する溝と、柱穴・土坑群を検出しました（**図版 29～31**）。

**溝３**は、トレンチ内の南北壁ぎわ２箇所でカギの手状に屈曲しながら、トレンチを横断するかたちで南北方向にのびる幅 1.8mの部分（溝３ 上層）を検出しました。また、溝の東壁沿いでは、

もう一段低く下がる上端幅１mの部分（溝３下層）を検出しました。

溝３の上層には部分的にコンクリートの破片、煉瓦のブロックが含まれ、下層からは、少量ですが 18 世紀代の陶磁器（信楽すり鉢片ほか）と、鉄釘が数本分みつかっています。このことから、溝３は江戸時代にいったん埋没し、数回の掘り直しの後、小学校の校舎の建て替え期（昭和初期）にはその役目を終えていたと判断されます。

この溝３の東側で、一部軸線のそろう土坑群（**土坑１・２および柱穴 11～23**）がみつかっています。土坑１・２は、径 50 cmをこえる不定形なもので、植物の倒木痕の可能性もあります。土坑２の埋土からは、ガラス玉（**図版 42**）がみつかっています。

柱穴は一部軸線のそろう箇所もありました。掘り方の径は 25～30 cmで、柱痕とみられる径５～10 cmの穴をともない、柱の抜き取り痕跡の残存がみられました。また、柱穴 20 ではこぶし大の石が乱雑に詰め込まれていました。柱穴のうち柱穴 11・13・14・15・16・18 の計６箇所から銭貨が出土しています（**図版 32～35**）。銭貨はほぼ柱穴の底部付近にかたまって出土する傾向があり、うち柱穴 11・15・18 の３箇所では、木製品・鉄製品・青銅製品がともなっていました（**図版 36～38**）。なお、柱穴 20 東側の、北壁際の落ち込みからほぼ全容のわかる染付碗が２点、トレンチ壁面の造成土中からサヌカイト剥片が２点（**図版 40**）、風倒木痕より土器片１点（**図版 41**：縄文土器か）が出土しています。

**【４トレンチ】**

４トレンチ東側では、2.6m×３mの小屋程度の規模をもつ建物跡を検出しました（**図版 43**）。また、建物跡から南東方向にむかって、黄灰色粘土の落ち込みが点々と広がる箇所があり、それが調査区外にのびるところで土層断面をみると、その部分だけ地山が数センチ程度の高まりをみせ、グラウンド造成時の砕石が敷かれていませんでした（**図版 44**）。これらについては、グラウンド造成前からあった建物跡と、その建物へといたる道状の高まりではないかと推定しました。同じ検出面からは、昭和８年（1933 年）の一銭銅貨が出土しているため、このころに使われていた可能性が考えられます。

４トレンチの西側では、様々な種類の人頭大の岩石が散在した状況でみつかりました（**図版 45**）。

岩石の種類は、サヌカイト（安山岩）、チャートなどで、いずれも石器の石材としてよく用いられるものであったため、当初は縄文時代の遺構にともなうものかとも考えましたが、サヌカイトの出土土坑（**図版 46**）が現在のグラウンド面の真砂土で埋められていることが判明し、結果的にグラウンドが整備される昭和 40 年代前後に廃棄された岩石群と判断しました。昭和 36 年（1961）頃にあった「岩石園」と、その教材にかかわるものと考えられます。

**【５トレンチ】**

５トレンチは、トレンチ西側と、校舎際にそった南北２m幅の撹乱が激しかったため、撹乱箇所をさけるかたちで南北幅４m、東西 12mの部分について調査を実施しました。トレンチの西側では、東西５m以上、南北３m以上の建物の基礎とみられる部分を検出しました（**図版 47・48**）。地山を掘りくぼめたあと、小石を多く含む土で整地し、そのうえに地山の粘土と整地土を混ぜ合わせた土で床を張った構造の建物であることが確認できました。同じ遺構面では、トレンチ東北部でカキ類の貝殻、江戸時代後半期の染付片や軟質の近世のすり鉢片（堺あるいは明石産すり鉢に類似）を捨てた土坑を検出しました。

**【６トレンチ】**

50×75cm のトレンチ。遺構・遺物はなく、地表下 30cm で地山を確認しました（**図版 49・50**）。

**b 遺物**

出土遺物は、土器（縄文土器か）、石製遺物（サヌカイト剥片）、青銅製品（銭貨・小柄）、木製品、ガラス製品、鉄製品、陶磁器各種があります。

**【石製遺物】** サヌカイト剥片は２点あり、いずれも二次的剥離や使用の痕跡はみとめられません。風化は進行しており、縄文時代の所産である可能性を考えてよいでしょう（**図版 40**）。

**【土器】** 土器片は摩滅が激しいですが、胎土の観察からみても縄文土器である可能性があります。ただし詳細な時期は不明です（**図版 41**）。

**【青銅製品】** 柱穴から出土した銭貨は、文字の判明するものでみると寛永通宝が確認できます。破片も含めて計 13 枚出土。ほかに柱穴 15 出土の鉄銭が２枚あります（**図版 32～38**）。柱穴 11 出

土の小柄は青銅製で、鉄製の刃部を失っています。長さ9.5㎝で、摩滅のため朦朧としていますが片面に装飾を施しています（**図版37**）。

**【木製品】** 柱穴群出土の木製品は、厚さ0.3～0.5㎝で板径3㎝の円盤状のもの（柱穴18）と、幅3㎝、長さ6㎝の長楕円形のもの（柱穴11・15）があります。出土状況からみて、銭貨・小判の代わりとして使用された可能性があります（**図版35・37**）。

**【ガラス製品】** 土坑2出土。径0.5㎝で紐通し穴がある乳白色の玉です（**図版42**）。

**【鉄製品】** 柱穴15出土の鉄製品は、現存長16㎝。錆のため全容は不明ですが、鎌の一部と判断されます（**図版38**）。

**【陶磁器】** 陶磁器は、わずかですが各トレンチで出土しています。とくに形のよくわかるものは、3トレンチ東北部北壁際の落ち込みでかたまって2点出土しています。肥前系磁器（有田）の染付碗で、17世紀末～18世紀前半ごろのものです（**図版39**）。

### iii　小結

今回の調査では、これまで知られていなかった江戸時代の遺跡が、小学校の地下に残っている事を明らかにできました。またそれとともに、桜ヶ丘遺跡の大部分は、グラウンド造成のためすでに削平をうけていることもわかりました。

**【江戸時代から近代の桜ヶ丘】**

現在のグラウンド地内を東北東方向に横断していた里道（溝と石敷）、各トレンチでみつかっている建物跡や柱穴群は、江戸時代から昭和初期（戦前）頃に使われていた生活の痕跡です。江戸時代の銭貨や鉄・青銅製品、陶磁器、昭和の一銭銅貨は、この推定をうらづけるものでしょう。

3トレンチでみつかった江戸時代の溝と柱穴群は、とくに注目される遺構です。

当調査地点は、「天ノ本（テンノモト）」という小字の地名が残されている区画内にあたります。吉野川と対岸の下市町阿知賀地区を見下ろし、遠くに吉野の連山を見渡す事ができ、東には名峰・高見山を望む立地条件もさることながら、とくにこの場所は、溝で区画されていたということに特徴があります。銭貨が入れられた柱穴群の性格はよくわかりませんが、建物を建てる際、

地鎮のため何らかの儀礼が行われた可能性はあります。刃物の一部や、円盤形・小判形の木製品（お金の代物か）を一緒に埋めるのも、この儀礼の特徴といえそうです。

この調査地点のある台地を南側に下った小字「森の下」に、室町時代の応永年間創建と伝える森神社（別名天皇社）の小さな祠が残っています（祭神は後醍醐天皇）。当調査地点の小字「テンノモト」の発音に共通性がみられます。今回検出した区画の溝と柱穴と、その西側にある風倒木痕のある風景は、江戸時代の一般的な家屋よりも、大きな樹木に囲まれ、溝によって建物が区画された神社・寺院のような建物の存在を推定させます。小字名「テンノモト」、森神社、ここから北方500mの距離にある桧垣本八幡神社との関係性など、今後調べてみる必要があります。11月19日にはこの江戸時代の遺構群を中心に現地説明会を開催し約100人の参加を得ました。

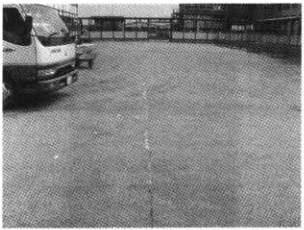
**【戦後の桜ヶ丘】**

戦後の昭和30年代から40年代にかけて、調査区一帯は小学校の敷地として拡幅されました。続けてコンクリート建の校舎等が新築・改築され、グラウンドの大規模な造成も数回おこなわれたようです。火事でやけた土を捨てた痕跡も調査区西端でみつかっています。

2005年の発掘調査後も、工事立会にともない、遺跡の地中観察をする機会がありました。これをふまえても、1950年の発掘調査以降さまざまな要因によって、縄文時代の遺構や包含層は、様相がわからないまま造成工事によって削平されている可能性が高いようです。

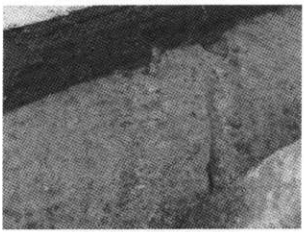
調査中に見学におとずれた年配の方などは、桜ヶ丘小学校に通っていた昔の子ども時代を思い出し、石鏃などを拾った記憶があると話をしてくれました。現在、石鏃や土器の破片はグラウンド一帯には落ちていませんが、2007年に実施された桜ヶ丘浄水場整備工事にともなう試掘調査では、遺跡の東南端にあたる丘陵地の縁辺部で、サヌカイトの剥片や石鏃を含む土坑（落ち込み）が検出されています（これについては別に報告する予定です）。

大淀桜ヶ丘遺跡は奈良県を代表する縄文時代の遺跡として知られていました。これからは、今回の調査成果や、すでに消えてしまった遺跡の大部分を含めて、遺跡の総合的な評価が必要となってきます。また宅地化が進んだ桜ヶ丘遺跡の北半部分についても、遺跡の範囲、残り具合など、工事立会の機会などを利用して、その実態解明に努めてゆきたいと考えています。

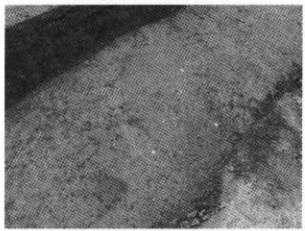


19 配管埋設地(調査前:西から)

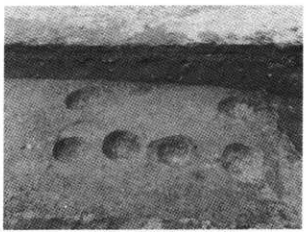
20 1トレンチ西半(西から)



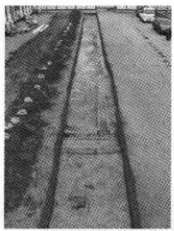
21 1トレンチ溝1・2(南から)



22 1トレンチ石敷1(南から)

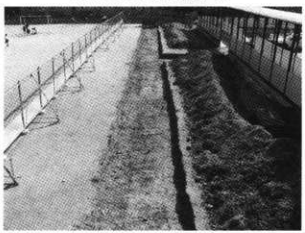


23 1トレンチ柱穴群(北から)



24 1トレンチ東半(西から)

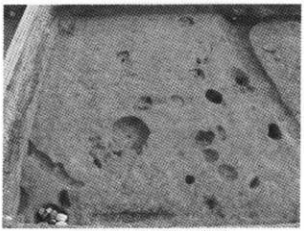
25 1トレンチ西端



26 2トレンチ(北から)

27 校舎新築箇所(調査前)

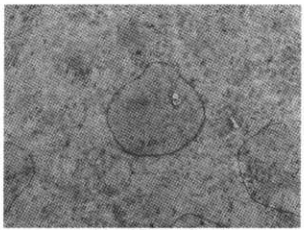
28 3トレンチ(西から)



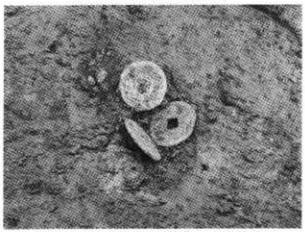
29 3トレンチ東半(北から)

30 3トレンチ東半(南から)

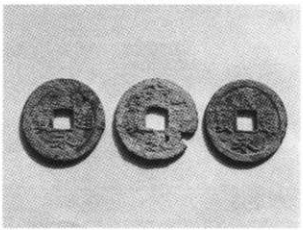
31 3トレンチ溝3(南から)



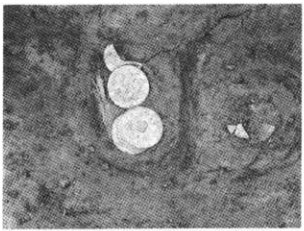
32 3トレンチ柱穴 14(西から)



33 3トレンチ柱穴 14 銭貨の出土状況

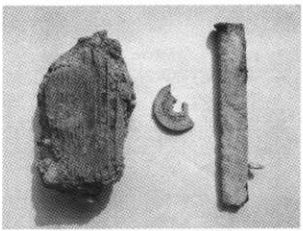


34 3トレンチ柱穴 14 出土の銭貨

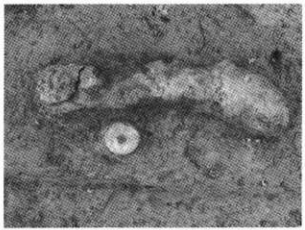


35 3トレンチ柱穴 18 銭貨等の出土状況

36 3トレンチ柱穴 11 遺物の出土状況(南から)

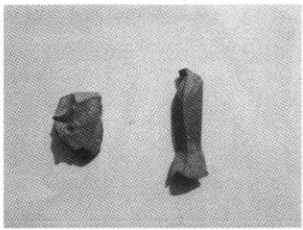


37 3トレンチ柱穴 11 出土遺物



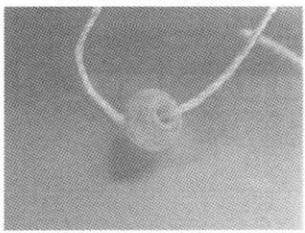
38 3トレンチ柱穴 15 遺物の出土状況

39 3トレンチ染付碗の出土状況



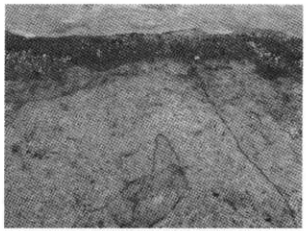
40 3トレンチ出土のサヌカイト剥片

41 3トレンチ出土土器(縄文土器か)

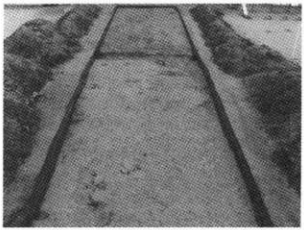


42 3トレンチ出土のガラス玉

43 4トレンチ東半(東から:中央右が建物跡)

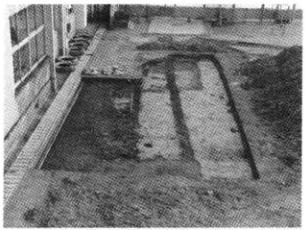


44 4トレンチ南側の土層断面(道状の高まり)

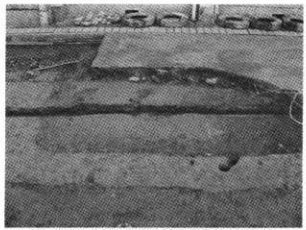


45 4トレンチ西半(西から)

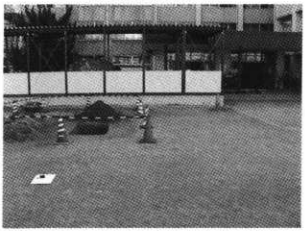
46 4トレンチサヌカイト出土土坑(北から)



47 5トレンチ(東から)



48 5トレンチ粘土張り床の建物跡(北から)



49 6トレンチ遠景(北から)

50 6トレンチ(北から)

## Ⅲ　おわりに

本報告を作成するにあたっては、大淀町立大淀桜ヶ丘小学校、史跡指定地の所有者である宗教法人世尊寺をはじめ、本町で文化財、教育・文化行政に携わる多くの人々、県内外の文化財関係者および研究者にご教示・ご協力を賜りました。記して感謝いたします。これを期に、町内外のさまざまな人に、町内にある文化財の正しい歴史が伝えられるよう努力を続けたいと思います。

### ＜参考文献＞


**歴史的環境**

竹山清文『奈良縣吉野郡　大淀村風俗誌』1918 年。

奈良県教育委員会『奈良県総合文化調査報告書−吉野川流域−』1954 年。

下市町史編纂委員会編『大和下市史』下市町教育委員会　1958 年。

吉野町史編纂委員会編『吉野町史』吉野町役場　1972 年。

下市町史編纂委員会編『大和下市史　続編』下市町教育委員会　1973 年。

大淀町史編集委員会（秋永政孝・広吉寿彦ほか）編『大淀町史』大淀町役場　1973 年。

大淀町教育委員会・大淀町ふるさと運動実行委員会『おおよど　ふるさとを知ろう』1979 年。

奈良県立橿原考古学研究所（千賀久ほか）編『大和古墳群』奈良県文化財調査報告書第 37 集　1987 年。

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『吉野・紀ノ川筋久の流れ−古代大和と紀伊の文化交流−』平成 5 年春季特別展図録　1993 年。

関川尚功「吉野郡大淀町福神遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1992 年度』奈良県立橿原考古学研究所　1993 年。

小池香津江「吉野郡大淀町馬佐遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1994 年度』奈良県立橿原考古学研究所　1995 年。

小池香津江「吉野郡大淀町土田遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1994 年度』奈良県立橿原考古学研究所　1995 年。

大淀町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所（近江俊秀ほか）編『越部ハサマ遺跡』大淀町文化財調査報告　第 1 冊　1995 年。

大淀町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所（河上邦彦・木村光保）編『越部古墳』大淀町文化財調査報告　第 2 冊　1997 年。

奈良県立橿原考古学研究所（松田真一）編『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人　由良大和古文化研究協会 1997 年。

辻宏幸「吉野郡大淀町北六田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1997 年度』奈良県立橿原考古学研究所　1998 年。

佐々木好直「吉野郡大淀町佐名伝遺跡第 1 次調査報告」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1999 年度』奈良県立橿原考古学研究所　2000 年。

佐々木好直「吉野郡大淀町佐名伝遺跡第 1 次調査報告」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1999 年度』奈良県立橿原考古学研究所　2000 年。

豊岡卓之「土田遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）2002 年』奈良県立橿原考古学研究所　2002 年。

人倉徳裕「薬水遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）2002 年』奈良県立橿原考古学研究所　2002 年。

十文字健「薬水遺跡第 2 次調査」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）2003 年』奈良県立橿原考古学研究所　2003 年。

南部裕樹「佐名伝遺跡 2003 年」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）2003 年』奈良県立橿原考古学研究所　2003 年。

前園実知雄・松田真一編著『吉野　仙境の歴史』文英堂　2004 年。

成瀬匡章「大淀町矢走で確認した城跡について」『青陵』奈良県立橿原考古学研究所紀要　No. 112　2004 年。

大淀町教育委員会編『大淀町文化財図録』2005 年。

松井一晃・鈴木一議・上　丹生遺物散布地 2006-1・2 次調査」『大和を掘る 25』2006 年度発掘調査速報展図録　2007 年。

成瀬匡章「大淀町薬水城山古墳の城郭遺構について」『青陵』奈良県立橿原考古学研究所紀要　No. 124　2008 年。

山本昭緒・松田度「奈良県吉野川流域の古代遺跡−吉野郡大淀町中増地区の踏査−」『青陵』奈良県立橿原考古学研究所紀要　No. 124　2008 年。

**比曾寺跡**

神宮司庁「比蘇寺」『古事類苑』宗教部五十四（仏教五十四） 1912年。

天沼俊一「比蘇寺址」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』Ⅳ 奈良縣 1918年（財団法人大和文化財保存会・1978年復刊 綜芸舎）。

廣文庫刊行会（物集高見）「比曾寺 ひそでら」『廣文庫』第十六冊 1918年。

上田萬藏『世尊寺沿革史略』聖徳太子1305年法要記念 1926年。

史蹟名勝天然記念物保存協会（上田三平） 比曾寺阯に於ける指定史蹟 第二回』史蹟調査報告第四 刀江書院 1928年。

望月信亨「ヒソデラ 比蘇寺」『望月仏教大辞典』第五巻 株式会社世界聖典刊行協会 1933年。

石田茂作「比曾寺」『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房 1936年（1977年復刻）。

保井芳太郎「比曾寺」『大和上代寺院志』大和史学会（『日本考古学文献集成』Ⅱ期4 1985年復刻）。

福山敏男「比蘇寺（現光寺）」『奈良朝寺院の研究』株式会社高桐書院 1948年。

堀池春峰「比蘇寺私考」『奈良県総合文化調査報告書-吉野川流域-』1954年（『南都仏教史の研究下<諸寺篇>』株式会社法藏館 1982年再録）。

奈良県教育委員会文化財保存課編「史跡比曽寺跡」『奈良県文化財図録』Ⅰ・記念物編 1964年。

竹居明男「吉野寺縁起の史料性をめぐって-欽明紀十四年五月戊辰朔条を中心に-」『日本書紀研究』第11冊 1979年。

吉坂敏和「史跡 比蘇寺跡について」『奈良文化女子短期大学紀要』第十一号 1980年（『吉野-その歴史と伝承-』名著出版 1990年再録）。

下中邦彦編「比曾村」『世尊寺』『奈良県の地名』日本歴史地名大系第三十巻 平凡社 1981年。

宮家準「第二章 吉野山と修験道」『大峰修験道の研究』佼成出版社 1988年。

国史大辞典編集委員会「ひそでら 比蘇寺」『国史大辞典』第十一巻 1990年。

遠日出典「比蘇山寺の成立」『奈良朝山岳寺院の研究』名著出版 1991年。

大矢良哲「世尊寺」『奈良県史』第6巻 寺院 1991年。

近江昌司「謎につつまれた山岳寺院」『古代の寺を考える-年代・氏族・交流-』帝塚山考古学研究所 1991年。

近江昌司「古代山岳寺院小考」『考古学ジャーナル』No.426 1998年。

日本地名学研究所編・池田末則監修『大和古代地名辞典』株式会社五月書房 1998年。

山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 雄山閣出版 2000年。

和田萃「古代史からみた霧地 吉野」『吉野 仙境の歴史』文英堂 2004年。

奈良県教育委員会『奈良県所在 近世の版本大般若経調査報告書』2005年。

財団法人元興寺文化財研究所『（財）大和文化財保存会援助事業による 世尊寺の版木』2005年。

奈良国立博物館『古密教 日本密教の胎動』特別展目録 2005年。

奈良県教育委員会『奈良県・指定文化財目録』2006年。

奈良県教育委員会『奈良県指定文化財 平成17年度版（第47集）』2007年。

松田度「33 比曽寺跡」『大和を掘る25』2006年度発掘調査速報展図録 2007年。

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『山の神と山の仏 山岳信仰の起源をさぐる-Ⅱ 平成19年度春季特別展図録 2007年。

吉原浩人「現光寺（比蘇寺）縁起から善光寺縁起へ-一光三尊像海彼伝来譚の受容と展開-」『明治大学研究』第5集 2007年。

**桜ヶ丘遺跡**

樋口清之「奈良縣吉野郡大淀町下渕発見の打製石器について」『考古学雑誌』第十八巻第二号 考古学会 1928年。

鹿島信夫「大和下岡の遺蹟」『近畿古文化叢考』葦牙書房 1943年。

奈良県教育委員会（小島俊次）「大淀桜ガ丘遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十三輯 1960年。

小島俊次『奈良県の考古学』郷土考古学叢書1 吉川弘文館 1965年。

大淀町立大淀桜ヶ丘小学校編『百年史』大淀町立大淀桜ヶ丘小学校百周年記念事業実行委員会 1975年。

松田真一「大淀町大淀桜ヶ丘遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1988年度』奈良県立橿原考古学研究所 1989年。

大淀町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所（豊岡卓之）編『大淀桜ヶ丘遺跡 試掘調査報告』大淀町文化財調査報告 第8集 2003年。

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | へいせいじゅうなな・はちねんどおおよどちょうぶんかざいちょうさほうこく<br>―おおよどさくらがおかいせき・しせきひそでらあと― |
| 書名 | 平成17・18年度大淀町文化財調査報告 |
| 副書名 | ―大淀桜ヶ丘遺跡・史跡比曽寺跡― |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 奈良県大淀町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 4 |
| 編著者名 | 泉森 皎・土橋理子・松田 度 |
| 編集機関 | 奈良県大淀町教育委員会 |
| 所在地 | 〒638－8501 奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090番地 |
| 発行年月日 | 2008（平成20）年 3月 31日 |

| ふりがな<br>遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | 北緯<br>° ′ ″ | 東経<br>° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| おおよどさくらがおかいせき | ならけんよしのぐんおおよどちょうひがいもと・しもぶち | | | | | | |
| 大淀桜ヶ丘遺跡 | 奈良県吉野郡大淀町桧垣本・下渕 | 29442 | 34°<br>23′<br>04″ | 135°<br>47′<br>30″ | 2005.10.3<br>～19、<br>10.31～<br>11.22 | 700 | 大淀町立大淀桜ヶ丘小学校の改築のともなう試掘調査 |
| しせきひそでらあと | ならけんよしのぐんおおよどちょうひそこあざてらうち・にしたに | | | | | | |
| 史跡比曽寺跡 | 奈良県吉野郡大淀町比曽小字寺内・西谷 | 29442 | 34°<br>24′<br>18″ | 135°<br>49′<br>54″ | 2005.10.2<br>1～31 | 22.6 | 町道東部4号線改良工事にともなう試掘調査 |

| 遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大淀桜ヶ丘遺跡 | 集落 | 縄文・江戸時代 | 江戸時代の土坑（柱穴）および溝 | サヌカイト剥片、縄文土器、銭貨・小柄（江戸時代）、各種陶磁器 | 江戸時代の区画溝と注穴は、寺院および神社等の建物の存在を推定させる。 |
| 史跡比曽寺跡 | 寺院 | 古代～中世 | 粘土敷き遺構 | 瓦（平・丸・軒平・軒丸）、須恵器・中近世土器・陶磁器、鈸釘 | 鎌倉時代から南北朝時代にかけての比曽寺跡の遺構が、地表下１ｍで確認された。 |

平成17・18年度 大淀町文化財調査報告

—大淀桜ヶ丘遺跡・史跡比曽寺跡—

奈良県大淀町文化財調査報告書　第４集

編集　奈良県大淀町教育委員会

〒638－8501　奈良県吉野郡大淀町檜垣本2090番地

印刷　大淀オフタイプ企業組合

〒638－0811　奈良県吉野郡大淀町土田285－３番地

発行　2008（平成20）年 3月 31日